

共同作業としての人格形成をめざして

深田 未来 生

(大学神学部教授)

人間は歴史に生きる。同時に歴史を生きる。すなわち人間は先に生きた者達の歩みが築いた道に生れ育つが、自らの歩みによってその道に変化をもたらし、時には新しい道を切り開く。

人間は歴史によって生かされ、また歴史を生かしめると言ってもよい。このプロセスには例外がなくすべての人間は何らかの形で係わるのである。歴史を生かすといっても必ずしも「よく」生かすとは限らない。悪魔的力を歴史に注入することもあるし、画期的に歴史の流れを変える人間の生き方や歴史との係わり方もある。キリスト教が主張する「歴史の主としてのイエス・キリスト」というのは人間の歴史への係わりを否定するのではなく、神の真理によって立ちつつ生きる人間と歩みを共にされるキリストが、歴史の中でその真理を明らかにし、且つその具現化を約束されるということである。

新島襄はキリスト者であった。何にも勝つてこの事実を新たに認識しないと彼の歴史性のみならず、抱いた理想、生み出し

た学校とその建学の理念、人間性や生き様は鮮明にならないのである。そして新島を生かしたキリスト教信仰をあいまいにして今日の同志社教育を見直し、あるべき姿を模索し、将来への道のりを見通そうとするのは無意味に等しい。創立者新島の歴史の過去に葬り去り彼の抱いた理想や教育理念とは無関係に巨大化した同志社を一種の教育企業として考えるのなら別である。時おり現実はそのように見えても、今日同志社に連なる者でそこまで言い切る人は少ないであろう。

そうだとするならば激動の二十世紀の終りに近い今、新しい世紀を目前にして私達は共々に真剣に、私事と同時に私達の責任として同志社教育の理想を描き直してみる必要がある。「私達の」というのは共同責任、共同作業ということであり、単に一定の行政的役職者や年功序列的長老のみがなすべき事ではないという意味である。

同志社が今日あるべき姿を求め創立者新島の描いた理想の成

就を目指すためには、新たに百二十年に近い歩みを歴史的に批判・分析しそのプロセスの中に新島を今一度位置付けることが必要とされる。新島の名前は同志社において少なくとも年四回は聞かれる。入学式、卒業式、創立記念式典そして新島永眠に係わる行事である。名前が用いられ理想が語られても、その言葉と教育の現場や現状があまりにもちぐはぐであり、根本的には無関係であるが如き印象を受けるのは私だけであろうか。新島の名前が独自性を表わす「錦の御旗」になつたり水戸黄門の印籠的に用いられることがないとは言えない。しかしまた、今日の同志社の教育と二十一世紀に向けてそのあるべき姿を探る作業を真剣に考える時、新島は避けることのできない、そして内容豊かなリトマス試験紙であり、かつ方向指示機的存在なのである。

新島の間像や教育思想の理解は人各々異なり、強調される点も様々であろう。卒業生ではない私が偶然同志社に係わりをもつようになった三十数年前、学内で新島の名を頻繁に耳にしながらも、なかなか明確なイメージが自分の内にわかぬのに困惑した憶えがある。結局新島の書き残したものを自ら読む内にいささか独断的ではあるが私なりの新島像を持つようになったのである。このことは二つの事を意味する。第一に私は新島を日本の歴史、キリスト教史、教育史といった史的観点からきわめて高く評価するようになったこと。第二に先にも述べたように新島が追い求めた理想や主張した思想と今日の同志社教育の現状のギャップの大きさに成す術を知らないといった一種

の悲観主義に陥ることである。もちろんこの悲観的姿勢自身、新島がかかげた理想に反するとは思ふのだが……。

私達は現代に生きながらその社会にただならぬ危険を感じ、危機意識がない人々が増えること自身にさらに危険を感じることもある。現実には表面に惑わされて自分の内にも危機感が薄らぐことすらあるという複雑なものだ。それでは新島が生きた時代はどうだったのか。理解を深めれば深めるほど新島は大きな時代に生きたことが明らかに。世の中がひっくり返るといふことが当てはまるとするならば新島の地上での四十七年間の生涯中日本はひっくり返つたのであつた。新島が日本を離れていた十年間に体制的変革が起つたのは事実であるが、日本の真の危機は一八六八年以降にあつたと考えると新島は日本が今後どうなるかという決定的な状況にあつた時に帰国したといえよう。三十一才の時であつた。新島がどこまで日本の現状を正確に認識し、それに応じた危機感をもつたかは明らかではない。しかし彼の中で鮮明だったのはキリスト教の伝道への熱意とキリスト教信仰に基づく人格形成を中心とした大学の設立の理想であつた。

同志社教育を考え直す時、繰り返し明らかにすべきことは、新島の内にみなぎつていたキリストへの信仰と、伝道者としての自己認識である。教育を目指したのは明確であるがなぜ教育なのか、そしてその教育の根底に何をすえるのか、新島において決定的かつ堅固なものとして存在したのであつた。新島には教育の「実」としての間像があつた。それは画一的、固定

的なものではなく個性的でありながら他者との共生を可能にする共通した精神的基盤が生み出すものであった。死が迫り来る日、新島の遺言の言葉は広く知られている。

「同志社の目的はキリスト教、文学、科学を推進することである。これらは相互に助け合うものとして追求されるべきである。同志社教育の目的は神学、文学、科学それ自体にあるのではなくて、むしろこれらの学問を通して、偉大な活力にとんだ人物が、真誠の自由と祖国に尽くすよう鍛えられることである。」
J・D・デイヴィスが書き記したものの自由訳であるが、新島の教育思想の中核を示している。すなわち学問の一人歩きを避け、あくまで人間を守る社会の形成に寄与しうる人格の養成が目的であり、そのためにあらゆるものが動員され、相互に密接に関連した作業が教育に求められるということである。人格の形成と一言で言ってもイメージはわきにくい。その展開の一つが、有名な良心についての新島の表現である。「大学設立の旨意」にある「一国の良心とも謂ふ可き人々」にしても、「良心之全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」にしても新島が言う人格の中核的要素は良心であったと言っても過言ではない。

では良心とは何か。人各々何らかの価値基準や判断を内に持つ。価値の優先順序と言ってもよい。新島にとつてそれはキリスト教による判断と選択であったが、彼は必ずしもキリスト教のみを基準にして良心を語っていない。伊藤彌彦教授は良心とは自由人の原理であるという。すなわち自分で到達した内面的価値判断に忠実である態度である。新島が生きたアメリカで

の九年間、彼が精神的に呼吸したのは自由の空気であった。それもニュー・イングランドを覆うように支配していたピューリタンに端を発する信仰の自由を中心にした人間の主体的、内面的自由であり、自我に基づく自由奔放の行為といった自由ではなかった。それは自己の確立を求め、その確立に不可欠な独自の価値体系と、そこから発する行動を貫く勇氣を求めた。新島の教育思想はこの自由を中心に置く。したがって「自由教育」ということになる。新島の葬列になびいた「のぼり」に記されていたそれである。同志社に連なる者は繰り返しこの新島の思想に立ち返つて自らを再検討する必要がある。

自由は新島において人間一人一人の内面に根ざし、その人々の価値観から生れるのではあるが、教育のプロセスは避けることのできない性質として集団性、と言うより共同体性を持つ。真の教育は人間が他者との係わりの中で経験し、またそのプロセスに貢献して初めて成り立つ。学校教育とは一種のコミュニケーション体験でありそのための組織である。私がかつて学んだ自由学園の創立者羽仁もと子は学校は「人間社会の自然の姿の上に建てられた一つの社会でなくてはならない」と主張していたが、その場合の社会とはコミュニティということである。コミュニティは人間の全体的参加によつて成り立つ。特定の興味で結ばれるクラブではない。全存在の投入というと仰仰しく聞こえるが、事実全人的関係が構成員の間にあつてこそ共同体ができてくるのである。このことを考えると真実な共同体には物理的限界があるように思える。どのように想像力をたくまし

くしても、新島が持った同志社の将来像に今日見るような巨大な学校組織と規模があつたとは思えない。大きな学校がコミュニケーションになれないというのではないが、きわめて困難であり、余程意識的に努力しない限り、単なる制度的機能しか果たせないということである。

今日の同志社の規模に関しては経済的、経営的要素が絡んでいることは否定できない。また社会的ニードにに応じて拡大した時代があり、その結果として今ある姿を見るのである。しかし、人口の変動から見て、向う五十年どころか、十年、二十年の単位で、特に大学に関連して学生人口は減少していくのだから、これを機会に同志社も規模を縮少し、理想と理念に基づいて教育姿勢と内容を再吟味する必要がある。このことがいかに現実に困難であつても、実によい機会であると思われる。コミユニティー再構成の機会である。問題は規模だけではない。組織はどうであろうか。同志社には独特の歴史的流れが生み出し、そして変形していった組織がある。今だによくわからない面があるからあるように思えると言つた方が正確である。独立採算制などを織り込んだこの組織は本部が統合し、総長が統治の任にあたる。実質的に総長は統合、統治の機能を充分果たしえない立場にあるように私には思える。したがつて総長は一種のコーディネーターであり、本部の機能もそれに等しい。

同志社を構成する各学校の自主制の尊重はきわめて大切なことである。しかし、また初等教育が欠けるとはいえ、一種の一貫教育を標榜する以上、常に究極の理想と目的を共有し続けて

いく何らかの形と努力がないと、共通するのは校旗とカレッジソングのみという状況を生み出すかもしれない。経済と経営について多くを語る知識も能力もない私だが、教育活動を支える経営と、その方法としての独立採算制がこのままの形で続けられてよいのか、もしそうでなければどういう形が可能なのか等を考えるのはけつして総長、理事長、理事会だけの責任ではなく、よりよい教育を目指す教職員全員に課せられている使命ではなからうか。同志社としてユニークな教育理念と理想を繰り返し明確にしつともその具体化に係わる経済と経営も教育の理想にそぐう形を目指すものであるべきなのだ。

経営にも関連するが、組織と機構は早い時代の流れの中で形骸化する傾向をもつ。その分析、再検討は定期に、全学的になされる必要がある。それは単に事務機構のことだけではない。教育活動に係わる組織や機構を含めた総合的な課題である。一例をあげよう。法人同志社のもとに各学校が独立採算制によつて運営されているのが現実だが、人的資源の交流があまりにも少ないのではないだろうか。大学だけをとりもつても四百人を越える専任教員がいるし、三百人以上の職員が大学運営に携わつている。何年いても全員を知ることができず、顔を見かけても名前を知らない場合が多い程大学内の交流が困難なのは仕方ない面もある。しかしこれだけ優れた人材をもつ学校が、大学に限らず、相互にその能力、知識、経験、人格を広く用いて新島が唱つた知、徳、体が調和された、すなわちバランスのとれた知識をもち、品性があり、良心に生きる人間の教育を推

進できないはずはない。

学際教育が強調されてきている。新島は知らなかつた用語であろうが、新島が受けたリベラルアーツ教育の根底にある姿勢は今日で言う学際的思考や教育である。それは高度な「専門」を前提としているが、学問の一分野の「独り歩き」を排する教育思想の姿勢である。学際教育はけつして大学だけに求められているものではない。教育の各レベルでの学びが常に人間存在全体に関連したものととして理解され推進される必要がある。人的交流の意義はここにある。同志社内の組織が横の関係で自由に人材が動ける可能性はないだろうか。必要に応じて大学の教職員が高校や中学に出向いて一定の機能を果たし、また中・高から大学の教育への参加が推進される「交流」である。前例がないわけではない。しかし、流動的な人的資源の活用のためには時間やエネルギーの余裕が保てる「労働」条件も考えられねばならない。人的交流や動員を考える関連で相互研修の現状も見直されるべきだろう。各学校や学部内では様々な研修や勉強会がなされているが、全学的なものはない。同志社に連なる人的資材の豊かさに触れたが、その思想を聞ける機会に限られているのである。時には総合的な学びの場を設定し、学校間の協力で共に研修することは共同体としての同志社の意識の高揚にも寄与しよう。あるいはテーマを限定し、小グループで研鑽したものを時おり全同志社向けに報告する会合なども有益かもしれない。活字による相互研修も大切だが、顔と顔を合わせて学びあう経験はより重要であろう。

新島が同志社教育の理想として描いた人間像はきわめて明確なものであつた。否定的に言えばそれは要領のよい、世渡り上手な知識や技術のみで自個の確立をねらう人間ではないということなのだ。問われているのは品性の問題である。これは新島の理想を考える点で避けて通れない中心的課題であるのだが、私など語る資格すら乏しい人間だけにとり上げにくいのである。私は式典で繰り返し読まれる新島の「同志社大学設立の始末」は原文で朗読されるべきと考えているのだが、それに加えて遺言も読まれてよいと主張したことがある。この二つは新島の教育宣言である。当然のことながらその時代的背景や精神を反映したドキュメントであり今日の青年達にはわかりにくい部分や表現もあるう。しかし二つに共通し、浮き彫りになるのは品性ある人間の輩出である。「良心の充満した」という言葉も品性に係わる。「精神と品行とを陶冶する活力」を基督教主義教育の中心に置いたのも、品性ある人間のみが「智徳兼備の民」として社会の血管に血として流れる時、社会の健康は保たれ活気ある世界の実現に日本は寄与しようとする新島は信じていたからであろう。品性は品格であり英語で言うキャラクターだが単純に言えば人格である。人個有の賜物が最大限生かされ、他者に対する深い配慮と共生の努力を絶やさず、真誠の自由へ向う活力に満ちた人格である。同志社が追い求めて止まない目的は人格の形成のための共同作業であり、その目的は新島が生きた時代も、また今日においても切実なものとして考えなければならぬと私は考えている。

新島襄の祈りとユーモア

竹中 正夫

(大学神学部教授)

祈りからの出発

一〇年にわたる海外における研鑽は、新島襄にとつては長い旅であった。

父母はさて如何在りけんけふの月

とうたつたように、望郷のおもいはおさえ難いものがあつた。自分の魂とも思つて大切にしていた長刀を贈つての国禁を侵した長旅であつた。ポストンに着いたならという一縷の望みはあつたものの、酷暑のなかに、乗組員がそれぞれ上陸したあと、一人船に残つて船番をし甲板掃除をして腰をいたくする。南北戦争は終りをつけ、リンカーン大統領暗殺のニュースにショックを覚えるとともに、戦後の物価騰貴の現実にわれて前途に不

安を抱いた。

かく迄と兼て覚悟はせしなれと

かくくかくと如此さうと思ハジ

じつところえて、人一倍辛抱づよかつた新島がうたつたうたである。彼の苦悩のおもいを窺い知ることが出来よう。

苦難のさなかに、新島は祈ることを覚えた。人は喜びおりに感謝のうたをうたい、苦しみのさなかにあつてひたすらに祈る。彼は、一八六五年七月二十四日東ポストンよりフリーポートでポストン市街に渡り、ワシントン街の本屋でロビンソン・クルソー漂流記を一ドル半で買っている。(『新島襄全集』八巻、三五頁―三六頁)

新島はロビンソン・クルソーにならつて祈っている。クルソーが波うちぎわにうちあげられ、すべてのものを失つたと

き謙虚のおもいで祈ったように新島は焼つくようなボストン港で腰の痛みを覚えながら祈った。この素朴な、そして切実な祈りが新島の北米の生活の出発点であった。それは、また、彼の生涯を支える中心点であった。

先般（一九二二年七月）新島襄の『年譜』（『新島襄全集』八巻）が発行された。これは、今までの研究成果をふまえ、資料を検索しその出典を明記し従来の研究の誤りを正し、詳細な記述をなしたものである。本文五八一頁、出典資料索引、新島襄在世中の七曜表などを加えると、七三三頁にわたる大部なもので、今後の新島研究の基盤となるものとして、その労作は高く評価されるものである。この『年譜』を辿ってゆきながら、新島襄がその生涯において幾多の苦難と試練に遭遇しつつも、同志社を開校し、大学の設立の基盤を築くことが出来たのは、新島の祈りにあつたといつてもよいと私は思った。

彼はハーディーのはからいで、下船して、ボストンの海員ホームに三日間泊まり込んで、英語で国外に脱出した理由書を書いているが、同時に新島は、英語の祈禱文を筆記している。（『全集』八巻、三六頁）やがてハーディーの紹介で、フィリップス・アカデミーに入学、アンドーヴァアのヒドン姉弟の家に下宿する。新島はヒドン家の二階に病臥していたミス・ヒドンのおばチャンドラーさんを見舞って神に祈っている。平素あまり祈った経験のないおばは新島の祈りに心を動かされる。ヒドン家に在住していたフリントン夫妻から算数・地理・作文などを習った外に、同夫人から毎晩、聖書の解説をきき、「ヨハネによる福音書」

を日本語に訳しはじめた。フリントンは「彼はアンドーヴァアに来る前に回心していたのだと思います」（『全集』一〇巻、七九頁）といっているのは、新島が祈りの人であつたことを物語っている。一八六六年二月三十日新島は洗礼をうけ、翌年九月より、アーモスト大学で学ぶようになるが、同室者のホランドは二人は聖書を一章ずつ読み、毎晩二人で祈っていることを書き送っている。（『全集』八巻、五三頁）

心の習慣

こうした若き日の新島の祈りが彼の心の習慣となり、彼のキヤクター（品格）を形成していった。「心の習慣」(The Habits of the Heart) ということばは、一八三〇年代にアメリカ人の国民性を分析したフランスの社会哲学者アレクシス・ド・トクヴィルがその名著、『アメリカの民主主義』のなかで用いることばである。東洋では、「習性となる」ということばで表現されているものを通じている。近年カリフォルニア大学バークレー校の宗教社会学者、ロバート・ペラー教授たちがアメリカ人の個人主義を分析し、その書名



を『心の習慣』（一九八五年）としたことから、このことば再び注目を集めるに至っている。

新島襄が、留学中に書き記した小さな文字が、現在、セーラムのピーボディ博物館に保存されている。それは「日々爾之十を取可し」という言葉である。これは、ルカによる福音書九章二十三節のことばであり、おそらく留学中の座右の銘として彼が心に刻んでいたものと思われる。

キリスト教主義教育のねがい

帰国を前にして、一八七四年一〇月九日からラットランドで開催されたアメリカン・ボードの第六十五年次大会で、日本に帰ってからの彼のビジョンを語り、そのための楮金を訴えたこととはあまりにも有名である。そこでは神戸の教会に教育機関のないことが指摘され、何らかの学校の必要性が訴えられている。（『同志社百年史』通史編一、一九頁）それが歴史の経過を辿って神戸ではなく大阪でもなく、京都となり、「伝道師養成所」ではなく、「キリスト教主義学校」として展開していったことは周知の事実である。ラットランドの重要な点は、どこにどのような学校をつくるかという問題ではなかった。何分激動期に十年も国を離れていた新島にとってみるなら、そのようなJOMOの問題は、日本に帰ってからのことであった。彼がラットランドで明確にしたことは、自分は、日本に帰って、キリスト教に根ざして教育事業に自らを献げるといふ決意表明であり、そのために支援

のアップビールを訴えたのであった。

同志社開校の祈り

一八七五（明治八）年十一月二十九日、同志社英学校が設立されたが、残念ながら、わたしたちは、そのときの模様を詳しく知ることが出来ない。しかし、その場に立ちあつたアメリカン・ボードの宣教師J・D・デイヴィスの記録によって、わたしたちは、同志社の出発は、式典ではなく、小さな祈り会であつたことを知るのである。デイヴィスはその日の日記をつぎのように記している。

今朝八時、新島の家での祈禱会をもつてわれわれの学校を始めた。この祈禱会には全生徒が参加した。それから校舎へ行き、あらたに生徒二人をうけ入れることにした。全部で七名の寄宿生と一名の通学生になる。（J・D・デイヴィス『新島襄の生涯』北垣宗治訳、六一―六二頁）

デイヴィスはつけ加えて、

あの朝開校に先立つて新島が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、まじめな祈りを私は決して忘れることはできない。すべての者が心から祈った。（同書 六二頁）

この祈り心が同志社の原点であることは、今日不変である。

それは、今日のような、一見世俗化の道を辿りつつある同志社において何を意味するのであろうか。各自の信教の自由を尊重しながら、キリスト教主義教育は、どのように、それぞれの世代において展開されるべきであるのか、教育や研究に携わるものとして「祈るころ」は、一部のキリスト教徒にのみ委ねられてよいものであろうか。同志社の原点に祈りごろがあるとするなら、今日の同志社人はどのような形でそれを自らの精神的な源泉として培っているのか。さらに、今日の私学がそれぞれ独自の個性を発揮することが期待されているときに、同志社においては立学の精神であるキリスト教の精神をどのようにその特色として教育の中で生かし発揮しようとしているのか。これらは、尋常な課題ではない。通り一辺の答えはないし、それぞれの学校によって異なるところがあると思う。しかし、この学園に働くものにとつて、避けることの出来ない課題であるように思う。

祈り心に学ぶもの

わたしは、新島の生涯を辿りながら彼の姿勢から学ぶいくつかの点を参考までにあげてみたいと思う。

新島襄が祈りの人であったという、なにか「まっとう臭い、非合理的な人間」のように思つて敬遠する人もあろう。新島の場合、熱狂的な感情の昂揚をともなつた祈りではなく、理性を

否定して宗教にむかわせるものではなかつた。彼は、同志社大
学設立の旨意に



吾人は敢て科学文学の知識を学習せしむるに止まらず、之れを学習せしむるに加へて、更に是等の知識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するハ、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信す、是れ基督教主義を以て、我が同志社大徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為めに、同志社大学を設立せんと欲する所以んなり

とのべている。ここでは、理性的認識は、否定されていない。それは、教育と研究において重要な位

置を占めている。しかし、祈る心は、理性や人間の能力を絶対化しない。むしろそれは人間の限界や愚かさや離反を告白することに始まる。傲慢な姿勢でなく謙虚ふおもいが、祈り心の基盤であるといつてよい。

謙虚なところ

勝海舟は、禅の人であったが、聖書のことばに関心をもっていた。彼が、同志社の卒業生で、新島襄の秘書をつとめていた加藤寿の求めに応じて書いた聖句がある。

滅亡之先

人心倨傲

得栄之先

必存謙遊

「破滅の先立つ

のは心の驕り

名譽に先つ

のは謙遊」

箴言一八ノ一二

二四年辛卯仲夏

海舟勝安芳

祈りの心は、謙虚に真理にむかう心といつてよい。それは、自己を絶対化せず、真理を求めて生きるころである。一言でいえば、敬天愛隣のおもいである。新島襄の同労者であったJ・D・デヴィスは、新島の没後直ちに記した『新島襄の生涯』においてつぎの聖句を引用して新島の生涯を偲んでいる。

兄弟の愛をもって互いにいつくしみ、進んで互いに尊敬し合いなさい。熱心で、うむことなく、靈に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、至難に耐え、常に祈りなさい

(ローマ人への手紙12・10、12)

祈りとユーモア

新島は祈る人であった故に、すべてのことを絶対化しなかった。自分を絶対化する人は、自分の限界を知るときに、焦燥にかられたり、不安におちこむことが多い。新島は、肉体的に弱い人であり、社会的には苦悩の多い人であった。しかし、いわゆる熱心党にありがちのようにキンキンしなかった。彼の同労者であったデヴィスは、南北戦争にも参加した軍人であり、情熱家であり、キリスト教の宣教師として、熱心党であった。彼は、萬里の波濤をこえてはるばる日本に来たのは、福音を宣べ伝えるためであると思っていた。そして、そのためなら、どんな苦勞も引きうける覚悟であった。しかし、なかなか伝道はすすまなかった。それどころか、せっかく開校した同志社の校内で聖書を教えることを京都府から禁じられたり、初期の教会に集るものの中には、変動が多く、なかには、別の動機をもっているものも少なくなかった。そんななかで、憤慨していたデヴィスに対して新島はつぎのようにのべている。

日本におけるミツシヨンの仕事は子供の遊びではないので、苦勞が多くても、問題をいまま少し氣樂に考へて、できるだけ休暇をとつてほしい、とにかくこの世を一日で改宗させるわけにはいかないのだから。(『全集』八卷、二〇六頁)

わたしは、新島襄の生涯のそここに、こうしたゆとりの空間が漂つていたように思われてならない。その一つとして指摘されるのは、一八八二(明治一五)年七月三日から十一日にまで六名の学生たちと試みた中仙道徒歩旅行である。その中には、二年前にストライキ事件で退学した徳富猪一郎も加わり、共に湯に入り、そば食い競争をし新島も八杯まで食べて頑張つたり、風光を賞するとともに師友の情を楽しんで旅をしている新島の姿は、堅苦しい新島ではなく、ユーモアのあるゆとりの新島である。

もう一つ新島のユーモアについて想起されることは寒梅の詩である。もともと寒梅は冬の真中に春を告げるかのようにほのかに咲く花であり、嚴寒の中にゆとりと希望を与えるものである。周知のように、寒梅の詩には、二つあり、一つは深井英五に与えたもので「真理似寒梅、敢侵風雪開」というものである。もう一つのもは、大中寅二によつて曲が付せられ『同志社歌集』に収録され、各学校でもよく歌われているものである。それは左のような詩である。

寒梅之詩

庭上一寒梅
笑侵風雪開
不爭又不力
自占百花魁

庭上の一寒梅
笑うて風雪を侵して開く
争わずまた力めず
自ら占む百花の魁

すべてものが枯れはて、厳しい寒さの日々にあつて、風雪を侵して咲く梅の花に新島は希望の微しをみている。この場合、笑うということばは、人が笑うという風に解釈されるものではない。むしろ、楚々^{しんしん}と花が咲く姿を示している。しかし、その姿は争わず、また力めず自ら天地に充滿している生命の働きを反映しており、それは、やがて来て来る春を約束しているという。ここに、苦難に耐え忍びながら希望を失わなかつた新島の姿勢をみる事が出来るように思う。

終りが大切

祈りの人であつた新島は「終り」を待望する人であつた。彼の説教の一つに「初メハ大切、ヨリ終リガ大切」(明治十三年九月十二日・於京都第二公会、明治十五年十月二十二日・於大阪浪花教会)というのがある。これは、箴言十九章二十節の「勧めに聞き従い、諭しを受け入れよ、将来、知恵を得ることのできるように」ということばをテキストとして語られているものである。彼は跨ぐぐり^{また}で有名な韓信の例をあげ、初によかつて、終りを全うしなくてはならないことを論じている。初めが大切であると

して暫時精を出して働いても知らず知らずの中に浮薄となり、多事多用にかまけ、世の風潮に流されて、精神を失い画にかいた幽霊の様なものとなつてならないとすすめているものである。『全集』二巻、一五頁―二二頁ここには、今日の同志社人が傾聴すべきものがあると思う。同志社が今日あるのは、新島襄とその遺志を継いだ先人たちの苦難と忍耐のおかげであった。わたしたちは、その先人たちの伝統と遺産にあぐらをかいてはならない。同志社の将来をおもい、さらによき伝統と遺産を次代の人びとに伝えていく様に励みたいと思う。

追悼集——同志社人物誌

同志社では明治二十年ころから、社長（総長）をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のこぼや故人の略歴などを各学校の機関誌（たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友會会報』『同志社時報』など）に掲げて哀悼の意を表してきた。その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用しがたい状態にあったが、社史資料室は先年来、それらの記事の総てを探し出して書物にまとめる作業をおこなつており現在左記の巻を刊行中である。

- 追悼集 I——同志社人物誌 明治十年代～明治四十年
- 追悼集 II——同志社人物誌 明治四十一年～大正四年
- 追悼集 III——同志社人物誌 大正五年～大正十五年
- 追悼集 IV——同志社人物誌 昭和二年～昭和六年
- 追悼集 V——同志社人物誌 昭和七年～昭和九年

（頒価一、五〇〇円）



発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
（〇七五）―二五―一三〇三七・八

同志社は再生するののか

沖田行司

(大学文学部教授)

新しい時代の到来を告げる兆がいたるところで見え始めて来た。誰の目にも旧世界の崩壊を感じとれた。しかし、次に来る時代の姿は見えない。不安と希望と可能性とが錯綜する不可視の状況の中で、同志社は生まれた。同志社は新しい時代に必要ならぬ徳と体とを兼ね備えた人間を世に送り出すことよって、新生日本の創造に貢献しようとした。新島襄によるこの畢生の事業は、正に百年を要する大計であった。

新島の時代から百年を経た今日、同志社を取り巻く世界は、再び大きく変わりつつある。この新しい時代に向けての変化の中で、同志社は、果たして新島の事業を継承しうるのか。同志社百年の存在意義が今まさに問われようとしているのである。同志社の将来を考えるにあたり、同志社の原点に立ち返ってみる必要がある。

一 「私立」する精神

日本の近代教育の発展史において、私学は重要な役割を担ってきたことはいうまでもない。とりわけ、戦後日本における経済成長を支えた高等教育の拡大は、私学の存在なくしては達成されなかつたと言っても過言ではない。それにもかかわらず、教育権の所在を国家に置いて出発した日本の近代教育においては、官立優先型の学校観が定着し、私学は徐徐にその「顔」を喪失して、補完的な存在と見なされるようになった。しかしながら、周知の如く、同志社は、日本の近代社会の建設に「私学」は不可欠の要素であるという新島の「私学」思想の下に創設されたものである。新島によれば「抑一国人民ノ教育ハ、人民ノ負担スベキモノニシテ、教育上の事ハ、何モカモ、政府ノ着手スベキモノニハ、非ズ」(「私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ

告ク」というように、国民教育は国民が自らの手により創出すべきものであった。つまり「人民の手に拠つて設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず」「同志社大学設立の旨意」とは、新しい時代を創造する主体者としての国民を想定したものに他ならず、「其生徒の独自一己の気象を發揮し、自治自立の人民を養成」(同前)することが、「私立大学特性の長所」(同前)であると新島はとらえた。新島は自由で主体的な個人が「私立」する、所謂市民社会不在の近代国家がいかに脆弱で危険に満ちたものであるかを熟知していた数少ない知識人の一人であった。さらに、開化政策を急ぐあまり、「心育」のともなわない「知育」を偏重する教育の「近代化」に対して、同志社教育の目的を、「独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき」(同前)と明言している。すなわち、同志社教育の根底には「基督教主義の道徳」が存在し、これが同志社教育と官立教育とを区別する根本的な相違点であった。

こうみてくると、今日、何故「私立」なのかという問いかけは、極めて平凡ではあるが、しかし、同志社にとつては、最も本質的な問題となってくる。近年、学生数の激減期に伴う、私学の「冬の時代」が叫ばれている。また、科学技術革新と、それがもたらすところの文化全般に至る変容、政治・経済を含む国際世界の構造変化等は、従来の学問や教育のラジカルな変革

を求めている。こうした状況に対して、多くの私学はいうに及ばず、国・公立においても、「学校革命」が進行している。とりわけ、私学においては「生き残り」と称する経営戦略がその改革構想の主要なる関心事となってくる。勿論、「冬の時代」を生き抜くためには、確かな財政的な見通しを持った経営的視点は欠くことができない。しかし、そうしたところにとどまってい

る限り、「私立」はあくまでも「負」の価値としてしか存在しない。常に官立の補完でしかありえないのである。

同志社が「私立」することの意味を再確認した時、日本及び世界に対して同志社が果たし得る役割が明確になるとともに、同志社がとるべき方向も定まるのではなからうか。たとえば「私立」する自由を求めて渡米した新島の「志」は、時代と国境を超えたあらゆる青年が共有するものである。こうした意味で同志社は世界の青年が開かれた研究・教育の「場」となりうる可能性を持っている。とりわけ、民族問題・環境問題等、二十一世紀に向けての課題は、一国では解決しえない、地球的規模での協力関係が必要としている。こうした時に、異文化の相互理解を通して、人類の共通課題を認識し、その理想の実現を目指して活躍しうる人材を育成することは、同志社教育の理念を実現することでもある。さらに、新しい知識や自己回復のための研究・教育を必要とする社会人に対して、積極的に門戸を開くことは、国民による国民のための教育を目指す同志社の「私立」する精神にもつともふさわしいことである。

以上に述べたことは、同志社に求められている課題の一例に

すぎない。しかし、これらの課題を実行するためには、組織・機構及びカリキュラムに至るまで、大きな改革が不可避となる。そして、何よりも、同志社教育を担っている社員の革命的な意識変革が大前提となる。

二 同志社教育の理想

新島は、明確な教育理念を持たず、知育偏重の傾向に走る「官立」教育に対し、「従来の教育は専ら智育に傾きて徳育の事は度外に放棄するの有様なれば、同社にては知徳兼備の教育を為し且つ独立自営の士を養成する事を目的とする者なり」（同志社大学記事「明治二十一年」と、同志社教育の特質と目的について述べている。知育と徳育に関する問題は政府や在野を問わず、常に教育論争の中心として論じられてきた。しかし、日本の近代教育に一貫してみられるのは、思想や文化総体から切り離された知育中心主義である。知育に対する信仰は、一方では民衆に立身出世という階層上昇の幻想を作り出した。とりわけ、経済至上主義の下で展開された戦後の知育偏重の教育は、過激な受験戦争を出現させ、本来、より人間的な人間を指すべき民主主義教育が、個性尊重の名の下で選別と疎外とを生み出す教育へと変貌した。さらに、「官立」教育を優先させ、それをモデルとして進化した戦後教育の再編過程の中で、本来一定の教育理念を持って創設された「私立」教育は、その教育理念を喪失し、ひたすら「官立」教育に追従することによって、その命脈

を保とうとする傾向を強めてきた。こうした中で、新島が求めた教育理念に立ちもどって将来の方向を模索することは、極めて重要な意味を持つといえよう。

知育と徳育が調和した全人教育を阻害するものとして、入学試験の在り方がしばしば問題とされる。教育の内実を知育に限定するとするならば、今日の偏差値教育に依じて、入学者を集めることが最も合理的であり、公平であろう。しかし、そうする限り、「官立」教育を頂点とする偏差値に基づく序列の束縛を受け、いつまでたっても「官立」教育の後塵を拝することから脱却できないことも事実である。しかも、多様な可能性を秘めた若い人々を魅きつけることが必ずしも出来るとは限らない。同志社がどのような学生を求めのかという、入学試験の在り方にかかわる問題は、とりもなおさず、同志社は如何なる教育を提供するのかという問題と深くかかわってくる。そこで、同志社教育を再生するための具体的な施策として、入学試験の改革を提唱したい。

人間の能力は実に豊かであり、多様であることはここで論ずるまでもない。また、これ程までに価値が多様化した現代社会において個性豊かな人材を育成する事が問われていることも周知の通りである。こうした人間の諸能力を一つの尺度で測定しえないことはいうまでもない。豊かな可能性を持った人材を積極的に発掘する努力が必要となろう。つまり、現行の入学試験の多様化である。入試の多様化については、既に多くの私学が着手しているし、一部の国・公立大学においても積極的に取り

組まれている。しかし、ここで注意しておかねばならないのは、入学試験の多様化を考える際「冬の時代」に向けての学生の量的確保という視点を先行させた場合、量と反比例して、質の低下は免れないという事である。入学試験の多様化は、あくまでも、同志社教育の理念に基づき、多様な才能と可能性を持った人材を受け容れる事を目的とすべきであろう。つまり、人間の諸能力の一つである学力以外の評価軸を積極的に導入することによって、「智徳兼備」の「自治自立」の人民を育成するという新島の教育理念の実現に近づこうとするものである。しかし、この事は、決して学力の軽視を意味するものではない。学力を無視した形で導入される、所謂「一芸入試」なるものは、大学の生命でもある学問の軽視につながり、やがては学生の質の低下にとどまらず、大学教育の解体をもたらすことになる。確かに推薦入試制度を含めて、入学試験の多様化をはかることは、私学の特性を具体化することであり、その私学に固有な教育を確立することを意味する。しかし、門地門閥に代わって、実力試験が登場して来た歴史の意味を考えれば、私学といえども入学試験が担ってきた公正と平等の原則を無視することはできない。こうした入試の多様化の大前提として、大学教育を受けるに相応しい、資格としての一定の学力が要求されることは言うまでもない。その際、何をもって一定の学力とするのか、また、数値化しえない人間の特性や能力をどのようにして発見し評価するのかというような、実に多くの難問を同時にかかえなければならぬ。

かくして、入学試験の多様化をはかるためには、入学試験の合理化という、従来の方向とは全く逆行する思考を必要とするであろう。ひとたび定着した慣行を打破して新たな制度をつくり上げるには、多大の労力と時間を要することは言うまでもない。しかし、大学入学試験の改革は、私学の問題にとどまらず、日本の教育そのものの在り方を変えて行く、最も根本的な課題でもある。どのような制度をつくり出すかは、今後の同志社の教育をも決定づける重要な問題でもあり、慎重に取り組む必要がある。

二 同志社の維新

旧い同志社から新生同志社への脱皮を阻害している要因として、学部自治の蝸壺化現象がある。各々の学部が、その責任において、またその学問体系の特性に依りて研究・教育の質の向上をはかり、その充実につとめること自体、何ら問題はない。こうした学部自治の精神は基本的に尊重されねばならない。しかし、学部自治の蝸壺化現象が生じてくると、各学部間の有機的連関が喪失され、いたるところに、その弊害が生じてくる。「人」と「物」における相互交流が停滞する中で、相互の無理解が増大し、総合大学であるにもかかわらず、各学部教育の専門学校化の傾向が強まる。他学部に対する無理解と不干渉主義は、大学全体にかかわる問題に対しては無責任体制を生み出す結果となる。また、所謂「学部エゴ」と呼ばれる姿勢は、各学部の発

展を阻害するばかりでなく、相互の特質までも相殺しかねない。学問の深化の過程で、隣接諸科学への学際的な共同研究の必要性が増大する現在、これらの蝸壺化現象は総合大学の特性を喪失させるとともに、教育と研究の両面にわたる低迷化をもたらす恐れもある。

来るべき私学の「冬の時代」に、同志社が生き残れる条件とは、窓口を拡げて、学問意欲や能力を欠如させた学生を引き入れることではなく、各学部の有機的連繫の下で、同志社で学ぶ意欲を持った学生に質の高い教育を提供し、学力・人格ともに抜きん出た人材を社会に輩出することにある。

これまで述べてきた同志社教育の理念を実現するためには、同志社にラジカルな維新を断行する以外に方法はない。同志社のあらゆる部局において、各々の組織を活性化する手だてを講じることが必要となろう。往往にして、活性化といえは管理を強化し、合理化して効率を上げることという錯覚がある。しかし、これは、むしろ組織の生命を硬化化する結果をもたらすものである。一言でいえば、若い世代の主体性を引き出すことが、組織の活性化の要諦である。それには、若い世代の意見が反映されるようなシステムを作り上げる必要がある。新島の遺言には、「同志社ニ於てハ個儻不羈なる書生ヲ順導す可き」という一節があるが、学生に対するこの姿勢は、同時に次の時代に同志社を担う人材を育成する上においても極めて重要である。それには、第一に言路を開く事である。同志社の将来を決定するよう重要な政策決定には、十年後、二十年後に同志社と直接連

命をともしする若い世代の意見を大いに反映させるべきである。また、若い世代の積極的な人材登用を実現することも重要である。若者が夢と理想を語らなくなった組織に活性化などは断じてあり得ないのである。

今日の同志社において、活性化を妨げている要因の一つに、朋党の弊害がある。朋党とは、有り体に言えば学内派閥である。本来、同志社の将来を構想し、さらなる発展を希う行為が、権力争奪のための、手段を選ばぬ運動へと変じるようなことは、キリスト教主義を建学の精神とする大学にあつてはならないことである。同志社の将来について考えたり語ったりすることが、特定の朋党に左袒したり、反対することになると、良識ある人々の声が止み、束縛を嫌う若い世代は発言を拒否するであろう。こうした状況が出現することは極力避けねばならない。「個儻不羈なる書生」を受け容れ、その個性を伸張させ、さらに同志社を担う貴重な人材へと育成させることができるかどうかは、同志社の動脈硬化の症状を診断する一つの方法でもある。また、このような状況においてこそ、同志社のキリスト教主義とキリスト者の本領が問われるのではなからうか。

新島の遺言では、さらに「同志社は隆なるニ従ひ機械的二流の恐れあり切に之を戒慎す可き事」と続けられている。現在進行している大学改革は、従来とは質的に異なる変容を要求するものである。とりわけ私立大学にとっては、大袈裟にいえば、発展か衰退かの二者択一を迫るものである。状況が激しく流動する中で、手をこまねいて立ちどまることは、衰退を意味

同志社は再生するのが

する。同志社の衆知を結集して、この改革に取り組まない限り、同志社に未来は考えられなくなるであろう。社員ニ望ム所ハ充分維持方ニ注意シ、学校ヲシテ一地位ニ安着セス、日々月々進歩改良セシムルノ策ナカルベカラス」(南山義塾ニ望ム)とは、正に新島が百年後の同志社のために残した警告に他ならない。

最後に、同志社教育の将来について、教員の果たす役割に言及しておかねばならない。新島は「教員ヲ選択スルニ注意セザルベカラス」(南山義塾ニ望ム)といい、教員の責任について次のように述べている。「今ノ教師多クハ人物ヲ養成スルヲ以テ其ノ目的トセス、月給ノ多少ニヨリ其所ヲ移シ月給ヲ貧リ、イサクカ己ノ淫慾ヲ逞スル等ノ輩モ陸続輩出スルアレハ、如何シテ生徒ノ品行ヲ端正ナラシメ、有用ノ人物ヲ陶冶シ得ベケンヤ。」(同前)知育偏重の教育を肯正し、「知徳兼備」の教育を実践するためには、教員の厳しい自覚が必要だというのである。つまり、新島の徳育とは、教員の生き様を通して学生の「率先者」となり、「標準」となることを意味するものであった。権力志向型や御都合主義、それに自己中心的な教員からは「良心の全身に充滿したる丈夫」を養成することはできないということであろう。「官立」とは異なる、キリスト教主義をもって徳育の基本とする私立同志社の教育を担う教員の資質とは何かを改めて問い返してみるべきであろう。

多様な能力を有した良質の学生を集める方法を講じ、質の高い教育を提供することが、同志社教育の将来を開く前提条件であると述べてきたが、そのためには、高度な学問研究を併せも

つことが重要であろう。若い優秀な研究者を育成することも重要な課題となろう。

新生同志社に向かつての同志社維新を断行するには、同志社に対する深い愛情と堅い意志と情熱と、それに魁となる者に投げかけられる誹謗にも立ち向かう勇気が求められる。そのようにして新島襄は同志社を設立し、また今、そのようにして、同志社は再生するのである。



キリスト教主義から学ぶこと

——新島襄の教育理念から——

佐野 安仁

(大学文学部教授)

一 時代の要請と改革の視点

私立大学が、大きな転機に立たされて、改革に着手しようとするとき、つねに問題となることは、「建学の精神」であり、また、それによって築き上げられた「伝統と歴史」についてである。同志社大学には新島襄によって公表された「同志社大学設立の旨意」があり、そこに、「同志社大学設立の目的」と「同志社大学の独自性」とが明確に示されている。(その抜粋は同志社教職員組合手帳に新島の遺言と共に掲載されており、日常、容易に知ることができる。)いま、要請されている大学改革において「個性化」とか「多様化」という視点は、当然のことながら、私立大学の場合、「設立の精神」と深く係わるものといえよう。しかし、改革的取組みの現実には、必ずしも私学の個性を發揮する「設立の精神」と深く係わっているとは思えない。

各私立大学ともに時代の要請に敏感に反応しており、その反応の仕方はかなり画一化しているようにも思われる。同志社大学でも大学設置基準の「大綱化」の問題に関連してカリキュラムの再編、新しい構想による大学院の拡大と充実、国際化による留学生や客員教授の受け入れ問題、田辺校地の活性化、新しい学部・学科の構想、宗教部の改組などをはじめ制度的な改革が論議されている。これには、同志社大学の個性に関連したのもあり、他私学と共通しているものもある。そうして、その多くは時代や社会の要請に反応したものである。

「一国百年の大計」として設立された同志社大学も、すでに百年の歩みを経過しており、その歩みの反省から独自の改革が求められている。だがこの改革の必要性は、時代や社会が要請していることと無関係ではない。

そこで、改革に着手しようとするとき、まず大切なことは、「設立の旨意」をもって出発した同志社百年余りの歴史的歩み

の中にあつて、つまり、同志社の伝統と歴史に立脚して、内的変革をはかると同時に、その変革の視点に時代的要請を十分に考慮することであろう。

その際にとりわけ大切なことは、「設立の旨意」に立ち帰つて変革の方向性を吟味することである。そのためには、同志社大学の、したがつて新島襄の教育理念が、今日、どのような意義をもつかについて言及しなければならない。

二 キリスト教主義と教育の道徳性

前述のことからまず第一に言及すべきことは、新島が「知識を運用する品性と精神」の養成のために、また、「良心を手腕に運用する人物」を輩出するために必要な活力として選びとつた「キリスト教主義」についてである。新島にとつて同志社大学設立の目的は「基督教主義」を以て、「同志社大学徳育の基本」とし、この教育を施すことにあつた。「基督教主義を以て徳育の基本と為せり」とは、世上一般の教育家の思想とは、少なくとも主意を異にする同志社大学の特色であつた。そしてこの特色のために同志社は、いばらの道を歩まねばならなかつたと新島は明記している。

新島にとつて同志社大学の特色であつた「基督教主義」とは、神学上の問題というよりは、教育上の基本問題であつた。新島は教育の力が国運の盛衰に大きく関係しており、また、それが文明、文化の根幹であることを米国において洞察した。しかも

その教育を活性化化する生きた真正な力こそ「基督教」にあると確信した。そこで新島は、「上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義」を「教育に適用し」さらに「此の主義を以て品行を陶冶する人物」を養成しようとしたのである。つまり、キリスト教は教育と密接に関係しており、教育の基本はキリスト教にあると確信していたのである。また、信仰による確信は、道理を排除するものではなく、両者は両立し、相補うべきものと考へたように、キリスト教と教育とは相補うべき関係にあると考へた。

こうした新島の見解において学ぶべきことが二つある。その一つは「基督教主義」によつて品性、精神を育成するという見解である。これは一般には、キリスト教による「品性教育」とか「道徳教育」と理解されている。もう一つは、基督教主義を以て「教育の道徳性」を問題としている点である。この二つの見解のうち二つめの点に注目する必要がある。新島は西欧文化の根源であるキリスト教の真理に照らして、つねに教育のあり方を問いただそうとしていた。キリスト教の真理をもつて的を明確にし、その的に向つて教育全般の営みを確実なものにしようとしたのである。しかし、同志社大学の歴史において、この的から逸脱し、方向を見失ひかけたことが幾度かあつた。そのときの同志社大学にどのような栄光があつたであらうか。歴史上の諸事実を顧みつつ、つねに「教育の道徳性」を問いただそうとするとき、同志社大学にとつて「基督教主義の徳育の基本とす」という理念は教育的な営みそれ自体の「道徳性」を検

証する基準であり、進むべき方向を照らしだす光を意味している。

しかし、同志社大学における現実には、キリスト者の減少化が顕著であり、キリスト教主義による共同体理念は稀薄になりつつある。同志社構成員一人びとりの思想と信条の自由を認め、各人の人権を尊重するとき、同志社大学は、草創期におけるようなキリスト教主義による一致が困難となつていく。つまり現状は思想・信条の多元性を容認せざるをえない状況にある。そうした状況下でキリスト教主義によつて「教育の道徳性」を問い、構成員全体の共通認識を得ようとすることは、困難である。

新島は、こうした深刻な問題を一〇〇年前にすでに察知していた。彼は「自由な憲法と高等教育が国民に保証されるならば、これこそはずばらしい偉業といふべきである」と明治憲法の発布や国立大学の拡充を評価しながら、つぎのような問題点を指摘している。「しかしながらこれら二つの要因は、まさに言論の自由をもたらず要因であつて、このために自由な意見同士の恐るべき衝突をもたらしかねない」というのである。またこれは国家的混乱状態におちいり、国民が自分勝手な歩みをする危険を招きかねないと指摘している。こうした「危急の際」に、その救済の道を新島は、キリスト教にあると確信していた。それは、「常に無限の知恵をもつて国々を支配し給う神が、この国家的なわざわいと絶望からわれわれを救出する」という見解に示されている。この確信は、神がつねに上から、われわれを支配するということに対するものだけでなく、神が、つねにわれわれ

れの中に生き、われわれと共に働いているということに対するものであつた。したがつて、それはすべての現実的な対立的見解を神が人間と共に働くことで和解に導くという確信であつた。これは、対立的見解をキリスト教を盾に抑えこむのではなく、思想・信条の多元性の中で神の知恵を求めつつ和解の道をさぐりだそうとすることを意味している。新島は、キリスト教の真理と愛が、「すべてを一つに結ぶ帯」として働くことを確信していた。だから新島は思想・信条の多元性の中にあつて調和と和解に至る道を神に求めた。そうして思想・信条の多元を前提に展開される現実的な論争を通してキリスト教主義の真価を開示しようとしたのである。

こうした努力には、つねにキリスト教信仰が前提となつていく。しかし今日、思想・信条が極めて多元的な状況下では、ことさら「思想・信条を超えて一致をめざす精神」が必要である。この精神は、それぞれの経歴と資質をもつた人びとが、「真理と正義の追求に互に有益に補足しあう」ことを意味し、同時に互の「有限性と過誤性」を認めあつて協力することを意味している。また、「統一や統合」を強制するのではなく、「継続的な対話」を重視する。さらに「至高の善」に関心をもつて、それを追求する協働を意味する。これは、最高の目的に向つて「調和し協調し相補しあうこと」を求めた新島の精神に通じている。新島は、この精神をキリスト教から学びとつたのである。したがつてキリスト教主義により「教育の道徳性」を問うということとは、まず教育的営みをキリスト教の真理によつて方向づける

ということである。これを現状に即して適用すれば人間の有限性と過誤性を自覚しつつ、真理と正義を求めることに協働する精神をもって教育の営みを検証するということになる。この精神で第一に、教育の営みが、人間一人びとりを大切に、「人間尊重、人権尊重の教育」であるか、第二に隣人愛の立場から、「人類愛・人類共生・文化的共生を重視する教育」であるか、第三には多元的な思想・信条を前提に、対話を通して「民主的な問題解決を重視する教育」であるかどうかを問うことである。重要なことは、こうした精神的風土の活性化にあり、新島の教育理念の意義と彼から学ぶべき精神とは、この点にある。また、同志社大学における自己点検と自己評価の基本的視点もここにある。

三 キリスト教主義と国際理解の根幹

「基督教主義を以て徳育の基本とす」という新島の教育理念を、前述のように「教育の道徳性」を問うという視点でとらえた。これには、さらに「国際理解」という視点からも学ぶべきことがある。そもそも同志社は、新島の教育理念に賛同した米国人と宣教師の協力によって出発している。そこには、すでに国際協力の種がまかれていた。この点については後で若干ふれらるとして、注目すべきことは、新島が文化の異なる日本にあえてキリスト教を導入しようとしたことであり、キリスト教主義の学校を創設したことである。この学校は「基督教拡張の手段」

として設立したもので、また「伝道師養成」を目的としたものでもなかった。もちろん、新島はアメリカン・ボードの宣教師補であったから伝道活動の責務を負っていた。しかし、キリスト教主義学校の設立には別の意図があった。その一つは米国において自分の前に開かれた新しい文化的世界の根源を、また、精神的にも活気にあふれていた新しい世界の真髄(キリスト教)を日本の青年に紹介し、その世界を理解させようとするものであった。

ところで、もう一つの意図は、仏教的伝統と儒教的倫理が支配する日本に、新しい世界の精神的根源であるキリスト教を導入し、それによって国家と国民の救済をはかろうとするものであった。これは、一面において国家をキリスト教化することとも思われる。だが他面において異国文化を包摂する弾力性と異国文化の本質を主体的に受けとめて、それを活用する力とで国家を発展させようとするものであった。新島は、何よりも自分の生き方を主体的に問うことである。新島は、キリスト教とその出会いをえた。そうしてキリスト教を自らの生き方の指針とした。この指針をもって新島は国家のあり方を展望し、国家の形成のために教育事業に着手した。この新島の教育事業は、なによりも米国の「文明の由帰て来る大本大幹」の体得によって発現したものである。したがって、新島は、「大本大幹」であるキリスト教に日本人の心意を向けさせようとした。これは、米国民の「大本大幹」の理解を求めたことになる。すなわち外国文明の

「大本大牒」をとらえ、それを理解することによって、一国を組織する教養の形成をめざしたのである。

新島のこのような思念は、まさに国際理解の原点であり、キリスト教理解によって国際理解の道を開示しようとしたのである。新島は、こうした観点でキリスト教主義の学校を設立したともいえる。事実、キリスト教主義に立つ同志社大学は外国からの資金援助と国内資金とによって設立されたものであり、米国の賛同者と国内の賛同者との力によって設立された。また、米国の宣教師の大きな支援によって出発している。これは民間レベルにおける日米の国際的協力の初穂といえる。新島は、同志社大学の設立を「アメリカと日本の間の永続的な平和の記念碑」であるとし、それを自らの誇りとせず「神の栄光」によるものと感謝している。

国際化とか国際理解とかが、強調されている昨今、新島に学ぶべきことは、異国文化の「大本大牒」を洞察し、これを深く理解するということであろう。また、文明の「大本大牒」を具体的に実現する事業を国際的な協力で展開することであろう。

そのために留学生や客員教授の受け入れ体制を充実させ外国人教授との共同研究や共同による講義の体制を確立する必要がある。また、共同研究のテーマ設定や、その研究を通して国際的に教育の水準を高めていく必要もあろう。しかし、基本的な問題としては、新島が一国の将来を展望して教育事業に着手したように、いま世界がどのような未来を展望しているか、各国民が進むべき方向をどのように定めているかについて相互に理解

し合うことであり、その上で連帯し、協力し問題を解決する教育を推進することである。今日、アジア諸国の歴史教育に関心をもち、歴史的事実に対する共通の理解を深め、未来に向けての責任を自覚して文化的に共生し連帯する教養の育成が重視されている。それには、前述のように、アジア諸国のそれぞれの歴史とその歴史の「大本大牒」の理解が大切である。新島が明らかにした国際理解の原点は、キリスト教の理解にあつたがこれを「文化の大本大牒」を理解することと解釈すれば、新島の思念は、国際理解の基本に関して、重要な意義を伝えているといえよう。

四 キリスト教主義と学問(教科)の教育

キリスト教主義をもって「教育の道徳性」を問うにしても、また、文明の「大本大牒」にふれて国際理解を深めるにしても、それには広く深い教養が必要とされる。新島は、その教養を育成するために「人間教育」を目ざす「liberal education」を重視した。これはキリスト教教育と無関係ではない。新島は、神学教育はもちろん、人文科学や自然科学においてもキリスト教教育は可能であるという結論を得ていた。たとえば、「キリスト教における真実と、自然科学における真実とは別箇のものとはされていなかった。あるいは、自然科学も宗教的な価値体系と融和して研究、教授がなされていた」と指摘されている。これは「同志社の教育とキリスト教とは一致すべきものである」と

いう新島の信念に關係した指摘である。

新島のこうした信念は、基本的には人間の職業を「神の召命」と考えることによつて生まれた。つまり、学問も、政治的な営みも法定的、経済的営みも「神の栄光のため」と考えたのである。これは「ピューリタンのニュー・イングランド神学」を顕著に反映したものであった。この神学的背景から新島は、キリスト教信仰に生きる教師、農民、実業家、政治家、法律家などの育成をめざした。キリスト者の育成において新島が強調したことは、どのような職業に生きようとも、その職業を「天職」として、その働きのにおいてキリストを証するということであった。そのためには自ら選択した道を極めねばならなかった。つまり、専門の知識や技能を徹しい修業をとうして身につけねばならなかった。キリスト者がこの卓越した専門的知識や技能をもつて世に奉仕することは、間接的な伝道を意味した。新島は、直接的にキリストを教化する伝道方法にもまして、この間接的な伝道を重視した。したがって、神学者、伝道師の養成だけでなく、さまざまな職業をもつてキリスト教を証するキリスト者を育成しようとした。

そのために新島は、神学だけでなく人文、社会、自然の各分野にわたる教育を構想したのである。これには、専門的な知識を徹底して習得させようとする側面と無知を不徳、不自由としてあらゆる分野の知識を習得させ、無知から人間を解放し自由にさせようという側面とがあった。前者は専門的知識と技能の「高度化」をめざすものであり、後者は、人間を無知から解放

する「自由」への教育を、また「真理による自由」の体得をめざした。新島にとつて、この両者はまさに相補的な關係をもつものであった。新島は、こうした教育の構想により「天職」を充実させる基礎を提供しようとしたのであり、また、「天職」をさらに充実させるために「生涯研窮シテ往々其妙奥ニ達スル」ような継続的な学習が必要であるとし、その必要性から「開発主義の教育手法」を重視したのである。

したがって、各人にとつて専門分野の学習も自然科学や社会科学や人文科学分野の学習も「天職」の充実ということで行なわれており、その点で諸学問の教育もキリスト教教育と一致するとみたのである。しかし、学問の研究において習得する知識とキリスト教の信仰から体得する真実とは質的に異なるとみなければならぬ。これを、新島は、学問(教科)は「知育」を、キリスト教は「徳育」をめざし、前者の運用は後者によつて統御されると考えた。つまり、学問の知識は、その活用の際してキリスト教の真理によつて方向づけられるというのである。

新島のこの教育観は、前述のキリスト教主義により「教育の道徳性」を問うという視点に通じるものであるが、その視点とは異なるもう一つの視点のあることに注目する必要がある。それは、キリスト教主義が、学問の研究を「活性化させる」という見方である。つまり、キリスト教信仰は、「真理の實在」を信仰により確信するものであり、その確信によつて学問や諸教科における真理の学習に希望と熱意が生じるというのである。

教科の教育や学問の研究を世俗的な営みとみる現代において、

あるいは、職業を「天職」とみることのできない現状において、学習や研究の意義は極めて多様化しており、また把握しにくい状況にある。いま、教科教育の意義を問うとき、その意義は、「人間教育」の視点からは、逸脱した方向で運用されており、その学習に対する熱意や希望は、失なわれ、学習に対する無気力が目だっている。新島は徹底してキリスト教に基づく「人間教育」を主張した。また、教科の学習や学問研究の意義を、真理の学習によつて自由になることとし、真理の实在を信じることで学習や研究への熱意をもち、それによつて人間的成長への希望をもちつづけた。この新島の教育観は、今日、スローガンの段階にとどまっている。「人間教育」に関して、一つあり方を示すものであり、それによつて教科教育の意義を明らかにしている。この遺産は教育学上伝統的な教育思想の流れに位置づけられるものといえよう。したがって新しい時代の中で「人間教育」を志向するとき、重要な礎石としての意味をもつのである。

以上、新島の教育理念、とりわけ「キリスト教主義」から今日、学ぶべきことを三つの視点から考察した。教育改革にはつねに具体的な処方が必要である。しかし、同時にそれには改革の理念が明確に示されねばならない。新島の教育理念は、今日の教育改革に最も基本的な視点を提示しているように思う。

参考文献 『新島襄全集』第一巻、第二巻

J・D デイヴィス（北垣訳）『新島襄の生涯』

『創設期の同志社』

——卒業生たちの回想録——

初期の同志社を語るときの文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名、湯浅初子ら女学校に学んだ十五名である。

勧める理由は、読みやすく、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざつくばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。彼らはいと楽しみに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

A5判四五二頁

頒価一、五〇〇円

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課

(〇七五)―二五―三〇三七・八

同志社の教育理念と学部教育について

深 田 三 徳

(大学法学部教授)

一 はじめに

同志社の教育理念がキリスト教主義、自由主義、独立自主などであることはよく知られている。しかし大学の各学部の教育理念が何であるかは漠然としており、普段あまり語られることはない。私自身も大学の法学部に所属しているが、法学部の教育理念について意識することはほとんどなかった。しかし最近、学部の教育理念や目的について語られる機会が少しずつ増えているように思われる。例えば、大学の自己点検・評価運営委員会の答申(大学広報一九九三・一・二)では、「自己点検・評価は大学を構成する各組織の理念・目的を明確にし、この理念・目的に照らして、自主的、主体的に行われるべきである」と記されている。学部の教育研究活動などの点検・評価は、学部の理念・目的に照らしてせよというわけである。

また一昨年の文部省の大学設置規程の改正によつて、各学部ではカリキュラムなどの改革の議論がなされている。法学部でも、改革作業をすすめるために、「中长期教育検討委員会」(大谷實教授委員長)が設置され、そのなかに、「法学部教育の理念についての検討委員会」が設けられた。私はその責任者として小委員会を主宰したが、本稿では、そこの議論の一端を最初に紹介し、その後で同志社の教育理念について私見を述べてみたいと思う。

二 法学部の教育理念について

小委員会は五人のメンバーから構成されており、そのなかでいろいろな問題を話し合った。私自身は、まず法学部の歴史をひもとくことから作業を開始し、そのなかで、明治一〇年代半ばの大学設立準備運動のなかで新島の頭のなかでは法学政治学

教育の重要性が強く意識されていたこと、明治二三年の遺言のなかでも「政法理財学部を置くは目下の事情到底避く可らざるなり」とされていたこと、明治二四年に設立され三七年に廃校になった政法学校では、法典整備期を背景にして、法・政治・経済についての広い知識をもつすぐれた人材の育成が期待されていたことなどを知った。また明治四五年、専門学校令による同志社大学政治経済部が生まれ、大正九年には、大学令による大学として政治学科と経済学科をもつ法学部になったこと、そして三年後には法律学科も設置され、今中次鷹、恒藤恭、中島重など多くの優秀な教授陣を揃えていたこと、その後、昭和の初期から戦争中にかけての苦難の時期を経た後、昭和二三年、新制の同志社大学法学部が発足したことなどをあらためて確認した。

ところで法学部の長い歴史を振り返った場合、学部の教育理念についての資料がほとんどみあたらない。おそらく議論されたことがあつたであろうがほとんど資料が残されていないのである。しかし法学部の歴史全体からして、次のことが明らかであるように思われる。つまり法学部における教育は、国立大学のように官僚や法曹養成に偏したりせず、また他の私学のように産業人養成の実学主義に偏したりもしなかったこと、そして同志社の教育理念を尊重するリベラルな教育を通して、さまざまな分野で活躍できる善き市民を育成しようとしてきたことである。そしてそのために戦前・戦後を通じて、多くの優秀なスタッフを抱えており、そのスタッフは、「真理その者が最高の権

威たるべきことを信じつつ、政治学、経済学、法学の問題に真摯にして自由なる討究にたづさはらむとする点において、志を同じくする者たち」(大正九年の『同志社論叢第一号の発刊の辞』であつたことである。ここには、同志社がアメリカのリベラル・アーツ・カレッジをモデルにした英学校からスタートした伝統や教育理念が反映しているように思われる。結局、小委員会では、法学部がこれまで同志社の教育理念や伝統を尊重するなかで、法学政治学の基礎的知識をもつ善き市民を育成しようとしてきたこと、そして今後もそれは尊重に値しており、維持発展させてゆくべきであることを確認した。なおこの「善き市民」とは、今日では、民主主義や人権原理などの普遍的原理を充分に理解しているだけでなく、専門的知識を具体的な場で充分に生かすことのできる広い教養とすぐれた人格をもっていることを意味しているであろう。

ところで小委員会における実際の議論では、理念よりもカリキュラムなどを具体的にどうすべきかについてより多くの時間が割かれた。そのなかで、今日の法学部の教育をとりまくさまざまな問題が話題になった。例えば、学問の専門化・高度化・情報化・国際化の傾向、専門教育に対する社会的要請の変化、女子学生の増加や学生一般の変化、司法試験などのいろいろな資格試験用の予備校の活発化などである。また今出川・田辺の二拠点問題、セメスター制、昼夜開講制などの他に、アンケート調査に表れた法学部学生たちの諸々の要望、つまり自由な科目選択志向、科目登録前のオリエンテーション、複数ゼミ登録

制、大教室講義や語学教育の改善の要望なども話題になった。さらにまた法学部における教育のありかたの選択肢として、従来のくさび型、専門科目重視型、主専攻副専攻型、多様性型などを検討し、多様な経験・能力とともに多様な人生設計・目標をもつ学生の増加、卒業後の進路の多様化傾向（法曹、準法律家、公務員、各種企業、自営業、マスコミ、教員、大学院進学、外国留学など）などを考慮して、多様性型が今後の望ましい方向であることについても話しあった。但し、「法学政治学の基礎的知識」を与えるために最低限いかなる範囲の専門科目の履修が必要であるかについては検討が必要であること、学生の自主性や選択を尊重すべきであるとはいえ、法学政治学の体系的理解や段階的履修がある程度必要であることなども議論しあった。

以上が小委員会での論議の一端の紹介である。小委員会や「中期教育検討委員会」、そして教授会での長い討議の後、昨年四月から実施された新しいカリキュラムは学生たちの間で比較的好評のようである。もしそうであるとすれば、その理由の一つは、「中期教育検討委員会」が理念問題から検討を開始し、委員が自由に意見を交換しあったこと、委員以外のメンバーのオブザーバー参加を認め、いろいろなカリキュラム改革の試案を募って検討したことなどがあると思う。いずれにせよ委員会のメンバーの一人として、学部の教育理念の確認が予想したほど容易ではないこと、また学部の教育はおもに知育に関係しており、その意味では自由にカリキュラムを創造できるわけであるが、歴史的には、同志社の教育理念や伝統がそれを大きく方向

づけてきたことを実感した。

三 キリスト教主義と世界の問題

さて大学教育とは、実質的には学部教育であり、したがって学部教育が大学の教育理念を尊重すべきことは当然である。しかし同志社の教育理念を現時点での学部教育にどのように生かし、どのようにして実践するかは難しい問題である。

同志社の教育理念がキリスト教主義、自由主義などであることについては最初に触れたとおりである。まず自由主義とは、「真誠の自由を愛する」ことのできる人物、独立自主の人物を育てることであり、それはまた学生の自由を尊重することでもあるであろう。このような自由主義の今日的意義についてはあまり異論がないように思われる。他方、キリスト教主義は、「唯上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義」を徳育の基本とする考え方である。それは、神を信じ、弱き人、病める人、虐げられている人に手をさしのべる人間を育成しようとする新島の考え方でもある。このようなキリスト教主義教育がこれまで果たしてきた意義は、同志社が過去に数多くのすぐれた人材を生んできたこと、とくにキリスト教にもとづく数多くの社会実践家、運動家を送り出してきたことによく示されている。

ところで同志社教育における知育と徳育をどのように関係づけるかという問題はこれまでもしばしば議論されてきており、

簡単に解答を見つけない問題である。それは、従来の一般教育科目における宗教学の重視、チャペル・アワールの運営、宗教部（宗教センター）の活動などをどう評価し、どう方向づけるかという問題にも関係している。私自身はキリスト教主義を今後も尊重してゆくべきであると考えているが、但し、「上帝を信じ」という部分は、若者たちの宗教離れや信教の自由原理との関係で今後ますます困難になってくるであろうと予想している。しかし「真理を愛し」や「人情を教くする」という部分については、これはこれからも十分に意義をもち続けると考えている。

ところで「人情を教くする」という部分についてであるが、これは、キリスト教の教えの核心にある「慈愛」や「隣人愛」に関係しており、今日の時点ではますます必要とされてきているものである。但し、キリスト教主義における慈愛や隣人愛は世界的レベルで捉える必要があるであろう。またこのようなキリスト教主義を大学教育ないし学部教育にどのように生かすかは難しい問題であるといえ、その努力を今後も続ける必要があるであろう。ここではほんの思いつきであるが、一例を挙げたて考えてみよう。

今日、「人権の普遍化と国際化」という言葉に示されているように、国際連合に加盟しているほとんどの国が憲法のなかで人権保障をうたっている。そして「世界人権宣言」を条約化する形で生まれた国際人権規約などの国際人権法に合意しつつある。このように人権原理は、国際社会のなかで普遍的な価値原理と

して受容され、国際政治や外交の世界などでしばしば言及されるようになっていく。これらの二〇世紀の人権文書を歴史的に遡ると、それはアメリカ独立宣言などの十八世紀人権文書につきあたり、それを生み出したものの一つが、イギリスのマグナカルタ以来のコモン・ローの伝統と、一七、一八世紀の近代自然法・自然権論である。そしてキリスト教、とくにピューリタニズムの強い影響もそこにあるのである。つまり宗教改革時における信教の自由の戦いが信教の自由、良心の自由などの発展を促進しているし、また神の下におけるすべての人々の平等の考え方が平等や民主主義の原理の実現に寄与しているのである。またキリスト教の慈愛・博愛の考え方は、社会権、生存権の形成発展の過程で一つの力となっていくことも事実である。さらにまた今日では、プロテスタント系の学者のみでなく、カソリック系の学者の間でも、人権原理は自然法との関連で重視されるようになってきている。このように西欧社会で発展した人権原理はキリスト教と密接に関係しているのである。教育理念としてのキリスト教主義をわかりやすく具体的な形で示し、また実践するものとして、このような人権原理の研究教育の促進をはかることも同志社の行き方の一つとして考えることができるであろう。

同志社はこれまでも人権原理の研究教育に熱心でないわけではなかったが、今後のそれは国際レベルの人権問題を射程に入れたものであるだろう。ここでは、アメリカ合衆国のハーバード・ロー・スクールの例を紹介してみよう。この法律大学院は

すぐれた人材を法曹界や政界などに送りだしているが、同時に、独自の人權プログラムによって人權関連の研究教育をおこなっている。ここでは人權関係の講義の他に、国連の人權機関・NGO・法律事務所などでの研修、タイなどの難民センターでの海外研修などを提供している。そして国連の人權専門の職員、NGOの人權専門の指導者、市民運動家、貧しい人々のために働く法律家などを育成している。また人權関係の学術大会もつたり研究雑誌を発行したりもしている。さらにまた世界各国の市民・学者・NGOなどから送られてくる人權情報を整理してデータベースに入れ、世界のNGOなどが利用できるような情報サービスも行っている。アメリカにはこのような人權プログラムをもつ大学が他にもいくつかあるといわれているが、同志社が参考にしてよい行き方の一つであろう。

もう一つ、キリスト教主義の慈愛や隣人愛を世界的レベルで実践するものとして、先進諸国が行っている開発途上国への援助の問題がある。わが国の政府開発援助(ODA)は、毎年、一兆数千億円の額にのぼり、その伸び率は他国を圧している。しかし多額の税金や郵便貯蓄などを使って行われている援助のしかたについては問題点が多い。例えば、非公開性、環境破壊、開発難民、公害輸出、そしてわが国の企業や被援助国の富裕層のみを潤して被援助国の大衆の利益になっていないことなどの問題が指摘されている。このような政府開発援助に関連する問題の研究教育を促進するのも、これからの大学の重要な仕事の一つであるであろう。例えば、大学院にODA関係の開発協力

専攻などをつくり、海外にでかけてゆく人材を育てたり、海外から人材を招いたりできればすばらしいと思う。

二〇世紀末に生きていられるわれわれは、人權問題や南北問題の他に、環境破壊、資源枯渇、人口増加、飢餓と難民、民族対立など多くの難問を抱えている。このようなグローバルな問題の研究に積極的に取り組むだけでなく、その解決のために現場で実践できるスケールの大きい人材の育成がこれからは必要である。このような人材を育てるためには、専門教育に加えて、高度な語学教育や他国の文化の教育も必要であろう。もしも新島が今日生きているとすれば、国内の問題よりも世界の問題に貢献できる人材の育成を説くのではなからうか。「一国の良心とも謂ふべき人々」は「世界の良心とも謂ふべき人々」でなければならぬであろう。

四 同志社教育の将来のために

以上は、同志社の教育理念と学部教育についての私見である。最後に、同志社教育の将来について一、二点、希望を述べておこう。

まず第一に、大学の機能にはいろいろあるものがあるが、研究の機能は最も重要な機能であり、今後も重視すべきであろう。その場合、長期的ななしグローバルな観点からしか価値をもたない学問や研究も大切にすべきであろう。また研究と並んで教育の機能もこれまで以上に重視すべきであるが、その場合、一

一人の学生の個性や能力をもう少し大事に育てることができ
るような条件整備が必要である。そして他方では、学生の学業
成績の評価、奨学金、進級、卒業、就職などに良い意味での競
争原理をもう少し機能させる努力が必要であらう。勉学などに
真剣に取り組んだものが十分に評価されるシステムが、学生の
勉学などへのインセンティブになるからである。

第二に、同志社の教育理念や学部教育の目的を実践するため
に、優秀なスタッフをもっと増やす必要があるであらう。われ
われが在外研究の際、外国の大学を選ぶときに留意するのは、
なによりも誰がその大学で活躍しているかである。かつてオッ
クスフォード大学に滞在した時、私の指導教授が、世界各国か
ら優秀な学者が集まってくるからわざわざ海外で行われる国際
学会にでかける必要がないと語っていたことがある。実施に夕
刻からカレッジのセミナー室で開始される研究会には他大学
や外国の研究者も参加し、盛んに研究討論が行われていた。優
秀なスタッフの存在は、大学の研究全体に刺激を与え、優秀な
スタッフと学生をさらに呼び入れるのである。ハーバードなど
の世界的に一流の大学が多額の報酬を払ってでも優秀な人材を
求めようとする理由の一つは、そのメリットが大きいからであ
る。同志社でも、近年、大学院教育の改革が議論されつつある
が、優秀なスタッフの確保のためには外国にまで公募する位の
気概があってもよいように思われる。また近年の女子学生の急
増を考慮して、女性スタッフの積極的な採用もはかるべきであ
らう。さらにまた大学全体の活性化のためには学問以外のスポ

ーツなどの分野での活躍も必要であり、そのためにすぐれた指
導者を迎えたいものである。

以上、法学部の一教員の立場から、拙い意見や希望を述べさ
せて頂いた。私の印象では、同志社は国公立の大学や他の私学
と比較してすぐれた部分を多くもっていると思う。大学のハー
ド面でも、他大学のそれと比較して見劣りはしない。むしろす
ぐれている部分が多い。同志社のこのような良い部分を生かし
て、今後、個性的で創造的な研究や教育を生みだすことができ
ればすばらしいと思う。



新島襄の「二つの顔」

—明治思想史上の位置づけをめぐる—

西田 毅

(大学法学部教授)

一

編集部への依頼は、同志社の現状と将来像を新島の建学理念をふまえて述べよということであるが、具体的な提言に入る前に、新島の思想やパーソナリティについて、どうしてもふれておきたい問題がある。それは、これまでに発表された新島研究において、十分言及されていないと思われるので、ここで、あえて私見を開陳するのも無駄ではなからう。

私は、最近、新島襄生誕一五〇年記念論文集に執筆する機会があり、新島と福沢諭吉の思想の比較を試みた(『新島襄と福沢諭吉—『自治自立』と『独立自尊』のあいだ—』新島襄 近代日本の先覚者』所収、晃洋書房刊)。改正徴兵令に対する新島の対応を調べるため、『新島襄全集』のなかから、関連するページを繰りなが

ら、請願書や意見書、メモ、書簡類などの資料を引き出し、そこに展開されている主張や政府官庁への対応をフォローした。そこで分ったことであるが、福沢の場合、同じ問題に対して、かれも慶應義塾の存亡に関わるとの危機感をもって積極的に動いているが、新島とくらべて、請願内容、政府文部省との交渉の姿勢にいくつかの興味深い相違点がみられる。

詳細な内容についてはここで反復を避けるが、福沢は、政府と人民の「力の平均」論という基本前提に立つて、体系的な学問・教育と政治の独立論を展開する。すなわち、文部省直轄の官立学校を総て分離、独立させて、毎年、政府より補助金を支給するか、まとまった運営資本を与えて、その利子で学校を経営すること、そして学校運営の指導機関として、政府から独立した純然たるアカデミーの機関、「日本国学問の会議所」、「集会所」を作ること提唱した。また、官立私立の別を問わず、唯一、厳正に生徒の学力を検査して、学力あり十分成業の見込みあり

と判定された者には、官立学校生徒と平等に徴兵猶予の特典を与えるべきだと力説している。このように、政府の官私の特典の差別を明確に非難し、さらに、これまで私学が有為の人材を世間に輩出した事実を正当に評価しようとしないう文部省に對して猛烈と反論を加え、慶應義塾の実績を堂々と公言している。それは、まさに『学問のすゝめ』で主張せられた「正理を唱て政府に迫る」鋭い氣迫と抵抗の精神の発露を見る思いがする。

それにくらべて、新島の政府に對する請願には、まことに謙遜でひたすら懇願の態度が示されている。まず、自らを「大日本天皇陛下の臣民」にして「聖天子を仰ぎ明政府を載くの臣民」、「草奔の一士」たる新島と規定し、「不肖を慙み且切に邦家を愛する衷情を好しと少し容る所あらば幸甚」という恭順かつ低姿勢の地平から、日本国民の尚武の氣象を盛んにするために、歩兵操練科設置願いを文部大臣森有礼に申請するのである。そして、徴兵猶予の特典を得るために、同志社が使用する教科書の内容や授業方法の検閲を官吏に願ひ出ており、必要とあらば、修正の指示に従う意思があることを相手に伝えている。

むろん、そこには、改正徴兵令の実施にともなう経営危機に對する悲痛な配慮があつたであらう。しかし、動機や戦術上の観点とは別に、新島の熱烈な愛国心や尊皇意識が、かれの「自治自立の人民」の育成を強調する自由主義的教育理念と共存していたことも看過してはならない。そこに、われわれは、キリスト者新島における伝統的儒教倫理の繫縛^{けいばく}や封建的武士意識の残滓を指摘できるかもしれない。陸奥宗光は、新島のキリスト

教と愛国心にふれて次のように述べている。曰く、新島は人を愛すると同時に国を愛するの情熱の持主であること、『靖献遺言』を書いた浅見綱齋（二六五二—一七一七）、江戸中期の儒者、崎門三傑の一人）にパウロを加えた人物と評している（島田三郎「新島先生に對する余の追憶」より）。

唯、新島の国家主義が、昭和の偏狭な日本主義精神と無縁なものであることは断わるまでもない（この点に関しては、拙稿「新島襄の私学論と國際主義」『私学公論』一九〇九年四月号を参照されたい）。

徳富蘇峰は、「人民の手に依りて成立する大学」（『国民之友』一九号、明治二年四月六日）という一文で、「日本人民の手に依り、政權の外に独立し、風塵の表に特出したる、一の大学を造り（中略）泰西的の學術を講じ、泰西的の道徳を講じ、智識に於ても新日本の人民となり、道徳に於ても新日本の人民となり、米国的の企業心^{エンペリヤリズム}を有し、英国的の執着力^{グリップ}を有し、天を愛し、人を愛するの新人民を教養し、其の大学の一乾坤は恰も噴火山の如く、常に万丈の光焰を吐いて、以て天下の人心を警醒し、以て新日本道徳の烽火台となり、以て新日本元氣の中心点となるを得せしめば、豈に又愉快ならずや」（傍点筆者）と述べている。師弟の教育理念の共鳴現象を痛感するが、同時に、そこにはいささか初期蘇峰の平民主義に引きよせられた理解が、たとえば、政權からの独立の理念の強調等にみられることも否定できない。つまり、福沢はもちろんのこと、貴族主義の復活に強く反発する若き蘇峰と比較しても、敢て政府に反抗せず、常に

「国の良民」たらんとした新島の姿勢は、はるかに温厚で恭順である。少くとも、新島は、自我と国家を対決させたり、個別課題の追求における矛盾の自覚は別として、全体としての政権と自由を二律背反においてとらえるタイプのリベラルではない。しかし、そこから、直ちに政府や国家に対する無原則な服従や状況追隨の姿勢を読み取ることはできない。

たとえば、書簡の人といわれる新島の学生たちにあてた多数の書簡にみられる抵抗と改革のすすめは、かれの思想とパーソナリティを構成する重要な側面であると解される。よく引用される古賀鶴次郎あて書簡の一節「今や満天下腐敗せり。これがために涙を灑ぐもの幾人かある。君等宜しく改革家となりて、此の不潔なる天下を一掃し賜へ。決して名利に汲々たる軽薄児の轍を踏み賜ふなかれ」という学生への激励にみられる激しい憂世のバトスは、安部磯雄のコトバを用いれば、まさに「慷慨悲歌の士」、「東洋的豪傑の風」気とも言うべき情念であろう。

このような「志士仁人」的指導者意識と結合した改革精神が、新島と自由民権運動の思想的リーダー、とくに、板垣退助、植木枝盛、中江兆民ら土佐派の民権志士との共感を生み出したのである。そして、同様に、明治二〇年代前半の自由進歩を代表する思想集団民友社グループから熱い注目を受け続けることになった。しかし、他方、改正徴兵令をめぐる新島の政府支配層への対応に瞥見しうるように、よく言えば権力への柔軟さ、より厳しく批判すれば、対決点が明確にされないかたちの政策への妥協や屈従がみられることも事実である。この政府の施策に

対する断固たる批判の希薄さという問題に関しては、新島の制度・機構理解、そして、国家・政治権力と宗教の関係のとりえ方というより広汎なテーマの検討を通してかれの思考方法をおそらくにする必要がある。

新島のパーソナリティにみられるこうしたいわば「二つの顔」を、われわれは、今後、どのように総合的に把握してゆくべきなのか。

新島山脈と形容しうる多彩な弟子たちの軌跡を辿るとき、戦前の「大日本帝国」や天皇制イデオロギーに対する「忠誠と反逆」の顕著なコントラストをみることができる。たとえば、草創期同志社の英才集団である熊本バンドのその後の国家主義への傾斜と転向、蘇峰と蘆花兄弟の対立、同じクリスチャンでありながら、日露戦勝祈願に奔走したキリスト教界の長老海老名弾正と草深い安中を舞台に反戦平和に徹した柏木義円、そして、安部磯雄、村井知至、山川均ら一群の社会主義者たち。もちろん、新島没後、日清戦争後の民権と国権の鋭い乖離という時代の推移のなかで、このようなコントラストが生じたのであるが、右にあげた左右両翼に分れた弟子たちの回想録にみられる社会活動の原点としての新島へのこだわりや強さを知るとき、私は、改めて、かれら弟子たちの国家への位相のちがいに驚かざるを得ない。

内村鑑三は、教育事業に熱心であった新島を評して、事業の結晶である同志社の生み出す人材の質によって校祖新島の価値が定まるとしたが、その伝でゆけば、上にみたコントラストを

新島の教育理念の質の問題とからめていかに評価すべきなのであろうか。

同志社建学の根本であるプロテスタンティズムの倫理は、原理的には明治国家の政策、とくに、明治二〇年代以降の天皇制国家の確立期における教育政策や宗教界の大勢と真向うから対立するものであった。しかし、異端視されるキリスト教という文化的環境のなかで、日本のキリスト者は次第に明治初期の革新性を失ない、柔順な体制順応派に変わりやがて、日露戦争後は保守主義者も顔負けする程の帝国主義的経綸の持主へと変貌を遂げる。そして、そのなかの代表的な人物の幾人かは新島の門弟であったことは広く知られている。

このような変容をみると、たとい新島がキリスト教にとつて比較的順風の時代に生きた人であったとしても、人間精神の近代化の実現という気が遠くなる程、困難な課題を掲げて真摯に一筋の道を歩まんとしたその姿勢との距離を思わずにはおれない。改めて、今、私は新島の素志に思いを馳せる。

同志社と並んで近代日本の「自由主義派」私学として、よく慶應や早稲田があげられる。しかし、新島の場合、福沢や大隈がめざした人材の育成が直面した問題とは異なる苦難に出会わざるを得なかった。周知のように、福沢は、近代日本の資本主義的発達を促進し、制度文物のみならず、欧米文明の前提である近代合理主義思想と主知主義を奨導し、大隈は、在野精神を説き、自由民権運動の一翼を担い長く藩閥政府と抗争をくりかえし、政党政治の実現に挺身した。それに対して、日本国民将

来の運命は「独り政治の改良に存せず、独り物質的文明の進歩に存せず、実にもつぱら国民教化の力にある」を信じた新島は、次のようにキリスト教主義教育の必要を力説する。すなわち、西洋文明の繁栄をもたらしたのは、キリスト教の文明であり、「基督教の主義は、血液の如く、万事万物にみな注入せざるはなし、而して我邦に於ては、ただ外形の文明を取ってこれを取らざるは、これなほ皮肉を採って血液を遺すもの」と西洋文明の根本、「その文明の由つて来る大本」を注視した。そして、この認識に基づいて、「活ける力ある基督教主義」教育を実施して「科学文学の智識を運用するの品行と精神とを養成せん」としたのである。いわば、日本国民の精神革命の宣言である。ここに、国体や教育勅語の臣民教育を推進する明治国家との衝突がひきおこされる根本的原因があった。

キリスト教と社会主義が天皇制国家の二大対決原理である以上、いやしくも、同志社が原理に忠実たらんと欲すれば、慶應義塾や早稲田とは別種のそしてはるかに困難な事態に立ち到らざるを得ないのは事理明白である。しかし、この問題は、新島没後の同志社の歩みの検証とは一応別個のいわば同志社史の原論的課題として銘記すべき事柄であろう。

二

具体的な提言をする余白がもうなくなってしまうが、これまでの議論との関連において思いつくままに一、二述べてみた

い。

まず第一は新島研究センター（仮称）の設置である。この種の研究組織として、学外ではすでに慶應義塾の福沢諭吉協会と福沢研究センターがある。前者は、二〇年以上前に設立され、会員は学者、研究者にとどまらず、広く卒業生や学外の参加者から構成されている。会の性格は社団法人で、福沢に関する研究会、講演会、セミナー、展覧会を定期的で開催したり資料の蒐集整理、さらには、福沢ゆかりの国内外の土地を訪ねる旅行ツアーも企画されるなど当世流行のカルチャーセンター的役割も果たしている。後者は、よりアカデミックな純然たる研究組織でこちらもメンバーは慶應に限らず、広く全国の学者や外国人研究者を加えて、活発に研究会や各種の記念講演会など開かれていた。そして両者ともに、年鑑、手帖、（以上福沢論吉協会発行）、研究年報、研究資料集（名著復刻シリーズ、以上福沢研究センター発行）等の文献を定期に刊行している。

私は、現在、両組織の会員で、会の活動に参加する機会があるが、その特徴は、「福沢精神の宣揚普及」を期して、広く国内外の研究者や市民に開かれている点にある。福沢研究センターの趣意書によれば、「福沢と義塾が近代日本形成に果たした役割について幅広い文脈のもとで研究し、近代日本文化の研究に資する」目的で「福沢を中心とする近代日本研究の『場』」を創造することをめざしているのである。福沢が今日、ひとり慶應義塾の福沢にとどまらず、世界の福沢となっている背景にはこのような慶應当局と熱意ある関係有志の人々の努力があることを忘

れるべきではない。

省りみて、わが同志社の新島研究のシステムや新島精神の普及運動の進め方には幾つか改革を要する点があるように思わざるを得ない。従来の新島研究の蓄積を基にさらに広く国の内外の研究者や教師に門戸を開き、さらに卒業生、関心ある一般市民の参加を得て、活発な討議と実りある成果の発表を通して、より客観的な新島と同志社像の確立の急務を感じるのは筆者一人ではあるまい。

第二に建学以来重視されてきたリベラルアーツの一層の充実と専門教育のリンケージをどのように図るかという問題がある。

私のみるところ、リベラルアーツ（一般教育）の目的は、単なる専門課程教育の基礎段階に相当する課業ではない。むしろ、徹底した人間教育をめざすものではないか。ある意味で、現代日本の学部教育全体が、いわゆる専門と一般教育のちがいを越えて、それに取り組む必要があるともいえる。その意味で、新島の良心教育論は我々が準拠すべきリベラルアーツの方向を立派に指示しているといえるのではなからうか。煩を厭わず耳慣れた一節を引けば、「一国を維持するは、決して二、三英雄の力にあらざり、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざるべからず、これらの人民は一国の良心とも謂ふべき人々」なれば、「この一国の良心とも謂ふべき人々を養成せんと欲」すと『同志社大学設立の旨意』で宣揚している。

この理念こそ、まさに、現代に求められている人間教育の中身であろう。幸いにしてこのような建学の精神をもつ同志社は、

いたずらに政府主導型の専門教育偏重路線を歩むべきではなからう。広く歴史、文学、言語、宗教、哲学等の諸科目を通して、豊かな人間性を培い高い倫理意識と公共事に対する責任感をもつ人材を育てること、そして、人文自然両分野の先端を行く研究をいかに推進するのか、真に同志社らしい個性ある営為を模索する努力が望まれる。そして、このような努力の延長線上に待望久しい新学部学科の増設が計画されるべきであろう。

最後に同志社の財政基盤の強化について一言述べたい。私立大学にとって経営資金の調達が重要で難事業であるとの認識は、早くから新島にもあった。かれは、全国の知名士や無名の人人から義捐金を集めるため、東奔西走、文字通り粉骨砕身した。私学経営上、財政問題の占める比重の大きさは今も昔に変わらない。すでに、欧米の有力大学が、日本とは比較にならぬ規模の助成をうけながら、同時に積極的な寄附金募集や贈与の働きかけに努めていることは周知の事実である。その中身は、資金や土地、建物などの不動産の供与にとどまらない。諸種の冠講座や蔵書、史料、マニユスクリプト、美術品、備品類の寄贈等多岐にわたるが、大学は、集めた資金のうち、まとまった一定の金額を基金としてプールし、将来に備えている。また、利息の一部を経常勘定に組み入れているのが常態である。日本の有力大学にも最近漸くこのような動きがあると仄聞するが、今後、同志社もこの種寄金に対する国への税制改革の働きかけと並行してファンドの強化に取り組むべき時に来ているといえよう。今や財政問題について、大学関係者は安易に学費値上げ

に頼ったり国庫助成の増額要求だけでなくその他さまざまな創意工夫を凝らさなければならぬ。

以上、アトランダムに私見を述べてみた。新島は大学の完成に二百年を期したといわれる。含意は一つの目安としての二百年であろうが、とにかく、漸く創立一二〇年を迎えようとする今、われわれは小異にこだわらず広く叡智を集めて将来の同志社の充実に向けて心をくだく秋ではあるまいか。



新島襄の教育理念と同志社大学の将来像

なぜ「キリスト教主義の大学」なのか

新島襄は、「キリスト教主義」に基く教育を施す大学の創立を強くのぞんだのであつて、「キリスト教」の大学をつくらうとしたのではなかつた。

それでは、なぜ新島は「キリスト教主義」の大学を創設しようとしたのか。それは新島が米国でキリスト教徒となつたためなのか。あるいは、そんな単純な動機によるのではなく、もっと深い目的が新島にはあつたのだろうか。この点が、私にとつては長い間解き難い謎として残つていた。

今回、本誌への寄稿を機会に、あらためてこの問題に挑戦してみようと思う。

明治二十一年十一月の『同志社大学設立の旨意』の中に、つぎのような文章がみられる。すこし長くなるが、ここに新島の

真情が浮き彫りにされていると思われるので、引用しておく。

杉江雅彦

(大学商学部教授)

歐洲文明の現象繁多なりと雖も、概して之れを論ずれば、基督教の文明にして、基督教の主義ハ、血液の如く、万事万物に皆な注入せざるはなし、而して我邦に於ては、唯た外形の文明を取つて之れを取らざるハ、是れ猶ほ皮肉を取つて血液を遺す者に非ずや、今まや我邦の青年ハ、皆な泰西の文学を修め、泰西の科学を修め、我邦を扶植する第二の国民とならんとせり、然れとも其教育たるや、帰着する所なく、皆其岐路に彷徨する者のあるに似たり、吾人ハ之を見て、実に我邦将来の爲めに浩歎に堪へざる者あり、吾人の不肖決して爲す所なしと雖も、皇天若し吾人に幸ひを下し、世上の君子、吾人が志を助くることあらば、吾人不肖と雖も、必ず今日に於て此の不肖を忘れ、此の大任に当らんと欲す。之れを要するに吾人は敢て科学文学の智識を

学習せしむるに止まらず、之れを学習せしむるに加へて、更に是等の智識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するハ、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信す、是れ基督教主義を以て、我か同志社大学徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為めに、同志社大学を設立せんと欲する所以んなり

新島が前後十年におよぶ滯米生活を経験して帰国した当時、およびその後における日本国内の動きは、いうまでもなく文明開化―つまり欧米文明の導入に汲々とし、しかもそれは、たとえば鹿鳴館に象徴されるように、うわべだけの物質文明の成果をわが国に取り入れたにすぎなかつた。米国やヨーロッパの近代文明が、キリスト教徒たちの手によつて創り出された事実を目のあたりに見てきた新島にとつて、日本国内のこの浮兆ぶりは坐視するに堪えなかつたにちがいない。だからこそ、「唯た基督教主義は、実に我か青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信し、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」という、新島の切実な教育目的が大学設立の中心に据えられたのであつた。新島はさらに、同志社大学に学ぶ者への期待として、つぎのように書いている。

勿論此の大学よりしては、或は政党に加入する者もあらん、或は農工商の業に従事する者もあらん、或は宗教の爲めに働く者もあらん、或は学者となる者もあらん、官吏となる者もあらん、其成就する所の者は、千差万別にして、敢て予じめ定む可からずと雖も、是等の人々ハ皆な一国の精神となり、元氣となり、柱石となる所の人々にして……

そしてあの有名な言葉である、

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民ハ一国の良心とも謂ふ可き人なり、而して吾人ハ即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す

へと続くのである。

いま静かに、新島の祖志に思いを馳せれば、結局は「一国の良心」となるべき人物を養成したいという一念に到達するのであつて、キリスト教主義に基づかなければそのような人物の養成は困難であると、新島は考えたからであつた。帰国後の新島の目に触れた明治初期の日本人たちの、あまりもの右往左往ぶりを深く憂えての教育理念の設定であつた、とも考えることができる。

もちろん、新島にとつてはキリスト教徒としての揺ぎなき信

仰があつた。日本へ帰つてキリスト教の宣教師を養成したいとの思いも強かつたにちがいない。しかし、だからといって、同志社大学をキリスト教のための大学として設立し、わが国のキリスト教徒を増やしたいと考えたのではなかつた。新島の言葉を借りれば、「吾人が志す所の者、尚ほ其上に在るなり」ということになる。

新島が滯米中、あるいは岩倉使節団に加わつた文部大丞田中不二麿に同行して、ヨーロッパ各地を視察した際に目のあたりにした欧米の近代的物質文明の基礎が、キリスト教徒によつてつくられたことに、新島は強い感銘を受けたはずである。しかも新島は、欧米諸国の大学や高等教育機関を訪問するという機会にも恵まれたために、近代文明の構築にとつて教育が欠かすことのできない重要な要素であることも、同時に思い知らされたはずである。

このように、新島がキリスト教主義と教育を結びつけ、さらにはニュー・イングランドで体得したデモクラシーの精神を日本で生かそうとすれば、同志社大学を設立する以外に新島には道はなかつた。

初期の同志社人に残した新島の影響

新島は十五年間、同志社で学校経営者および教師としての活動を行っているが、その中で最も有名な事件があつた。「自責の杖」事件であろう。事の経過については同志社関係者にとつては周

知のところなので、ここではその点に關しては省略するが、この事件においては、学校側の措置や対応に不満を表わして集団で無断欠席などの実力行使をした生徒たちに対して、新島は管理主義による処罰などは一切行わず、かえつて自分の掌を持つていた杖で打つことによつて、自ら反省の態度を示したことが、生徒たちのみならず教師連中にも大きな感銘を与えたということが重要であらう。

新島にしてみれば、教育とはたんに智識を授けるだけにとどまらず、教師の人格や良心が学生たちの心に浸み入ることこそ眞の教育だという強い信念があつたに相違ない。私は、新島から直接に薫陶を受けた初期の同志社人で、財界に進出した人たちにとくに関心を持ち、その人たちの足跡や事業観などを収集・整理する作業を行っているが、その中の一人で、第十三代目の日本銀行総裁となつた深井英五は、その著『回顧七十年』の中で同志社時代に新島から受けた影響をつぎのように記している。

私の心に残つた印象を要約すれば、第一には、自己の信念に立脚しなければならぬ、附和雷同や、誤魔化してはいけなと云ふことであつた。第二には、単に自己生活の爲めに働くのではない、世の中の爲めにやるように心掛けなければならぬと云ふことであつた。「世の中の爲め」と云ふのが先生の常用語であつたが、此頃謂ふ所の奉仕の觀念に該当すると思ふ。世の中の爲めになると云ふのは必ずし

も大事業を成すのみに限らない、分に応じてそれぞれの途
がある」と云はれた。第三には、何か仕事をしなければいけ
ないと云ふことであつた。仕事と云ふのも広い意味で、思
索研究の如きも其の内に含むと云はれた。先生の趣旨は、
仕事の種類の如何を問はず、世の中との接触を必要とし、
独善高踏を戒しむるにあつたと思ふ。

もつとも新島は、深井に対して右のように順序立てて説いた
のではなかつたようである。この中には、恐らく多分に深井の
主観的な解釈も混つていと受けとるべきだろうが、深井の述
懐するところによれば、

「自己の信念」、「世の中の爲めに尽す」、「仕事をする」是
等三つの言葉を屢々先生の口から聴いたことは確かである。
それが訓誨ではなく、先生の胸中を吐露される如く聞えた
ので私は一層深く感動した。神を父とし、人間を同胞とす
る教理の応用として、私の実践的人生觀の基礎が出来たの
である。

ということになつて、深井のいう「実践的人生觀」が、彼の同
志社在校中に受けた新島の強い示唆によつて形成されたことを
髣髴とさせる。

このように、新島から直接教えを受けた初期の同志社人たちは、
この深井のように、明確な形で新島の教育理念や理想を自

らのものにしていったことが読みとれるのである。しかし、現
在の同志社大学において果たして新島の目的は達せられてい
るのであろうか。いわゆる「新島精神」は生き続けているのだろ
うか。さらには将来、同志社大学が生き残るためには、新島の
教育理念や彼の理想をどのように生かしていくべきなのだろう
か。そうしたさまざまな問題を、つぎに考えてみたいと思う。

キリスト教主義教育の眞の意義

ここでもう一度、新島の「キリスト教主義」教育の意義につ
いてふれることにしよう。

新島が「キリスト教主義」による教育を同志社において実現
しようとした根底には、すでに述べた通り、新島自身が米國滯
在中およびヨーロッパ旅行中にふれた近代文明が、キリスト教
徒によつて創り出されたことに、強い衝撃をおぼえたからであ
つた。しかし、さらに重要な点は、多くのキリスト教徒たちが
人生の行動原理の基本に据えている、道徳の陶冶と禁欲の精神
が、わが國の近代文明の創出にとつても欠くことができないも
のであるとの確信が、新島にとつて揺ぎない思いとして固まつ
ていった、ということであろう。

同志社大学では、現在でもチャペルアワーが毎週開かれ、あ
るいは必修科目のひとつとして宗教学が開講され（現在では選
択科目としている学部もあるが）、入学式や卒業式もキリスト教
式で挙行するなど、形式的には「キリスト教主義」らしさを備

えてはいるが、だからといって、いわゆるソフトの部分で「キリスト教主義」教育が浸透しているかといえば、決してそうであるとは思えない。

しかし、私にいわせれば、かならずしも現在および将来における同志社大学が、殊更、「キリスト教主義」教育を標榜する必要はない。新島が同志社に根づかせようとしたのは、「品行を陶冶する人物」、「一国の良心とも謂ふ可き人々」を養成することであつたからである。いまや、かならずしもキリスト教主義に基づかなくとも、これらは可能なはずである。「同志社出身者は組織をつくらぬ」といった話を、企業に勤務する人たちから聞かされるのが決してすくなくない。たとえば早稲田や慶應出身者の多い大企業などでは、かならずといってよいほど社内にも「早稲田会」や「慶應会」が組織されており、また全国的にも強力な組織を形成しているという事実がある。

ところが同志社出身者は、早稲田や慶應のような形ではネットワークを形成することが苦手なのか、あるいはそうした組織をつくらうという意識に欠けるのか、恐らくその両方の理由によるものと思われるが、とにかく、同志社人には組織に頼りたがらない氣質が共通しているように感じられる。実はこの点こそが、「新島精神」の現れといえるものであり、個人の力一すなわち良心を軸に人生を歩む心構えが、自然に身についているといったら、褒めすぎになるだろうか。

「日本株式会社」という表現は、官民挙げて国益の追及のため一致して動く、日本人の集団的行動を示す言葉として解す

ことができるが、これはまさに、「個人」よりも「集団」を上位におく行動原理でもある。太平洋戦争後の日本経済の成長過程においては、このような行動原理が国際競争上、有利に機能したことはまぎれもない事実であるけれども、いまや経済大国といわれるほどの成熟段階に達したわが国にとって、このような集団による行動原理を上位におくことが、果たして国際的な同意を得ることができるかどうか、甚だ疑問といわざるをえないのである。

そういった観点からとらえるならば、同志社大学が現在でも培っている新島以来の「一国の良心」を教育する伝統を、将来にわたつて維持し続けることが、国際的に通用する人物の養成にとつてもきわめて重要なポイントとなるように思われる。

現在の同志社大学においては、「国際交流」の名のもとに、米国の主要大学をはじめ世界各国の大学と交流し、交換留学生の制度もおおい整備されつつあることは周知のところである。

しかし真の国際交流とは、たんに形の上での留学生交換や教員の交流だけにとどまるものではない。個人のレベルにおいても、心を分か合うことのできる、その意味ではまさにボーダレスの国際交流をこそ実現しなければならぬ。そのためには、国際交流施設を充実して日本人学生と外国人留学生、あるいは日本人教員と外国人教員の「出会い」の場をつくりあげることが重要な事業であるが、それとともに、「国際人・新島襄」に関する常設的、定期的な講義ならびに講座を創設することを提案したい。

すぐれた人格を持つ教師が必要

最後になってしまったが、新島は自らも含めて、「すぐれた人格を持つ教師」によって学生を指導することをひとつの大きな理想としていた。初期の同志社においては、たしかにこのような新島の理想を実現しようとするすぐれた教師たちが、それぞれ寝食を学生たちとともにして指導にあたっていたにちがいない。だからこそ、深井英五の回想にもあるように、人格形成の道場として同志社時代を位置づけることができたのであろう。

しかし、こんにちのように同志社大学が肥大化し、多くの授業が何百人、ときには一千人を越すようなマンモス教室でマスプロ教育が施こされている現実からは、新島が描いたような理想的な姿はみえてこない。その弊害を克服する目的で、法・経・商のような学部ではゼミナール形式の授業が持たれてはいるが、これで十分な成果があがっているかといえ、どうも疑問の余地がある。とくに、高校あるいは予備校での大学受験を目的とした教育課程を終えて、ようやく大学に入学した一年次の学生に対するアプローチが、各学部ともに不足しているように思われる。

大学が教育と研究の場であることを否定する人は誰もいない。それは大学にとって自明のこととされているが、教育と研究とどちらに軸足がかかっているかと問われた場合、「研究だ」と答える教員の方がむしろ多数を占めるのではあるまいか。たしか

に、大学教員にとっては研究は重要な仕事である。大学は研究の場であるとの認識を持って同志社に入社する教員もすくなくはあるまい。しかし、同時に大学は教育の場である。学生にとってみれば、大学における教育を通して、将来、社会に巣立つための準備を、人格形成面あるいは智識の習得面において完成させようとするのである。

良き教師のいるところには優秀な学生が集まる。しかも、良き教師とはたんに研究上優秀であるばかりでなく、教育者としてもすぐれていなければならないことはいうまでもない。教育者としてすぐれているというのは、学生の立場になつて考えることができる資質を指すものと私は解釈しているが、そういう教員が同志社大学に多く集まり（現在でも相当程度に満たされているが）、しかも田辺キャンパスにおける一、二年次の教育が中心となるカリキュラムを、各学部ごとにつくりあげていくという努力を惜しんではなるまい。それは、学部レベルでの教育は専門性を重んずるよりも、むしろ全人教育の方が重要だと考えるからである。

二百年の道のり

大 鉢 忠

(大学工学部教授)

新島襄が一八八三(明治十六)年、キリスト教主義の大学設立へ賛助を得るべく勝海舟を訪問したとき、勝海舟の質問に答えて新島襄は「これが完成は先ず二百年を期すべきでありましよう。」と述べたと聞いている。大学設立の夢を果たせず亡くなられた新島先生の理想を引き継いだ多くの卒業生により大学が設立され、さらに第二次世界大戦後の私立大学充実の中で今日の同志社大学に発展してきた。単に時が二百年過ぎただけでは創立者の意図したものには育たないであろうが、その二百年の半ばを過ぎた生誕百五十年の今、同志社はその創立者の意図に沿って進化しつつあると言つて良いと思う。そして新島先生の考えを時代を超えて継承することを求められていると思う。

書き残されたものが資料となるが、先生の表現されたものはあくまでも当時の環境での考え方である。先生が生きておられたら、当然、時代を超えて変わることのない本質的な部分もある

ろうが、その時代や環境に応じて考え方も変えていかれる筈のものである。当初から、新島先生が百十七年後の今日の世界状況や日本を予想できなかったらうし、その変化は急激なものであると思う。通信技術、コンピューター、ソフトウェア等の発展は社会そのものを変えている。江戸時代の『個人』の考え方と、現代の『個人』の考え方には大きな変化があり、キリストの教えに対する社会の認識も変化したと思われる。創立者の意図、それは人から教えられるものではなくて、継承する人が自分で自然にそれを継承して行くことになる。新島先生の考え方に直接触れる機会をもち、その社会の変化に即し、身近に触れながら考え方を継承して行く意外に道はなく、新しい方向を創造していくうえには、本物の創立者の意図に触れることが必要であろう。

「本物をみる。実際に体験する。」ことが如何に重要か。またこれらが、新島先生が体験されたアメリカにおける教育の本質

でないかと思う。我々の意識の中では、感動を通して物事に興味を持ち、それを発展させ、新しいものを創造して行くと思う。アーモスト大学に博物館や美術館があり図書館に古文書資料室があり、本物を自分の目で見る事が出来る。私が新島先生に関心を持ち、新島先生を知ろうとしたのも本物に接したからであると思う。アーモスト大学での在外研究という機会を得、当時、文学部の井上勝也先生も在外研究でアーモストにおられ、新島先生の英文書簡を中心に作られた新島伝 (*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* 1980) を紹介していただいた。アーモスト大学古文書資料室で新島先生の卒業時の写真、自筆のスケッチ、手紙など、本物の資料に接する機会を与えてもらい、ニュー・イングランドのアーモストで学ばれた先生の若い日々がよみがえってくるような感動でその伝記を読み上げた記憶がある。工学部末光力作先生が新島研究会の講演会で、社史資料室で七通の札幌農学校にこられたクラーク先生の新島先生宛英文手紙に興味を持って読んだ事が、新島先生とクラーク先生の関係に関心を持つようになった動機であり、楽しいものでしたと話しておられたのも本物を見ることと関係している。

幸い、同志社の社史資料室には新島先生関係のオリジナル資料の他、卒業生たちの新島先生を紹介する一級の資料が収集されている。先生の自筆のノートも残されている。これらを利用して、我々が新島先生の考えを継承していくためには、本物に接するための常設新島襄資料館を実現させたいと思っている。

「教育」は家庭における母親に始まり、人類の歴史とともにその形態は変化し、前述した如く新島先生の時代からも変化して今日に至っている。どの時代どの年齢においても変わらない教育の役割は「教え」さらに「育てる」二つであろうが、その内容が異なるはずである。新島先生はその区別をされていないが、一八八四年夏、ヨーロッパ経由で二度目のアメリカ行きの中で、イタリアのトレ・ペリチェ滞在中に書いた英文日記の中の随想に学校の方針にたいする先生の考え方を記されている。 (*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, p. 262; 『新島襄全集』第一〇巻、二八四頁)

我々の学校 (Training School) の方針

我々は、磨かないダイヤモンドの様でありたい。もし、内部に光るものを持てば、外見の荒つぼさは気にしない。よい。次の三つの要素を我々の永遠のモットーにしよう。

- 一、我々の基盤としてのキリスト
- 二、十分な資格を持つ先生 (Well qualified instructors)
- 三、よく整った図書館と完全な設備

(Well selected library and thorough equipment of apparatus)

これら三つの要素は我々の学校の真の輝き光るものとなるであろう。……もし、我々の中にキリストの命と光を持てば、たとえ外見はきたなく磨かれていなくても、我々は最も貴重なダイヤモンドなのである。

「教える」こととして、学生に「自治自立」の習性を身に付けさせることは新島先生がアメリカで体得した西欧の教育理念と思われるが、さらに徳富蘇峰に「大人とならんと欲すれば、自ら大人と思うなかれ」と人格の修養に努めさせ、キリストの教えを基にした人格形成を自ら取り入れておられた。これは方針一、に基づくものである。現在の大学においては、基礎の理論と思考方法の習得および集中力をつけることを学生に「教える」ことが本筋と思われようが、前述の新島先生が範を示した人格形成も「教える」ことの重要な柱である。一方、「育てる」ことは、学生諸君の活力にすべて依存し、それを我々がいかにサポートし、完全な設備を提供するかにかかっているが、先生の方針三、はそのことを教えてくれている。現在大学では、文部省の大綱化方針によって、戦後の一般教育必修のカリキュラムを改め、大学独自のカリキュラムを用意し、かつ入学選考の方式も多様化させつつある。また、一九九四年四月工学部の田辺キャンパスへ統合移転を機に、その跡地を利用する計画を策定中である。我が工学部も、設備の充実をはかる運びとなっている。電気工学科、電子工学科も検討中であるが、機械系、化学系の既設学科は機械システム工学科、エネルギー機械工学科、機能物質工学科、分子化学工学科と組織を変え、さらに新しく、知識工学科の設置により、ヒューマンインタフェース、情報の伝達と処理、およびマルチメディアに関する分野でも、同志社大学が今後の社会に大きな貢献をなすべく準備中である。完全

な設備を整えるという目標をもって、創立者の意図を時代を超えて継承しつつ、まさに変わろうとしている。

先生の方針の二、「十分な資格をもつ先生とは」を考えることは、私の新島先生観をまとめることになろうか。私は、新島先生について、三年前の『新島研究』七十六巻「新島襄先生永眠百周年記念特集号」のアンケートで「私の新島観」として次のように記した。「無欲で、柔軟な思考の出来た人。西洋と日本の違いを理解し、それを日本に伝えようとし、真の国際交流を実行した人。教育（人物を養成する）の本質を理解し、日本に伝えようとし、実行した人である。」と。

西洋の文化と日本の文化の違いがどこにあるかを最初に日本人として理解した人と考える一例は、当時二十七歳の新島先生がアメリカの日曜学校のステイムソン氏あての手紙（『新島襄全集』六巻、六五頁）で日本の子供の教育を紹介しておられることである。そこには教えることに対する先生の考えもでていようように思う。その内容として

日本の子供はアメリカの子供とは比較にならないほど両親に従うようにしつけられています。何をするのも両親の許しを得ることが必要で、もしも誤ったことを仕出かしたり、親に従わないことをしようものなら、ひどく叱られます。叱り方も普通たたいでもさしつかえのない所ではなくて、日本では子供の頭をたたいて叱ります。……

勉強は書き方に重点が置かれ、読み方にほんの少ししか時間をさきません。学んだことを復唱する事を決してせず、どう読むかという読み方を単に学ぶだけです。書き方は先生によって模範が示され、それに従って練習帳が真っ黒になるまで何回も何回も書き、一週間に練習したことをその週の終わりに清書しなくてはなりません。

自分達の国のすべての県・市・町の名前をそれらがどこにあるかを示す地図を用いなくて学びます。動物と鳥それに自然界の事物の全ての名前を学びますが、挿し絵や図解は使いません。……

学校では算術はやらす、家庭教師に教わります。アラビア数字を用いずソロバンを使って足し算引算は同じぐらいの早さで出来ますが、かけ算割り算はアメリカの子供ほど早くはありません。……

と紹介されている。

新島先生が「教育の本質を理解」された人と考えることは当たり前すぎる事なのであるが、それらは『同志社大学設立の旨意』と「遺言」に凝縮されていると思う。函館脱出からの目標と言うべき日本社会の近代化への情熱をもって、体験を積まれる内に、キリスト主義に基づく倫理観に立脚した近代化を考えられるようになった。それにはアメリカやヨーロッパにある真の大学を作ることが必要であり、そして大学教育を通した人物養成であった。

アメリカ留学の最後の日本へ帰国する直前の、バーモント州で開かれたアメリカンボードの年次総会での演説をスタートに多くの人々に訴え、協力を得て行かれたのである。人々の考えかたを変えて行く二百年の大事業であったのである。勝海舟も『氷川清話』で根気の強さや公平無私の眼を必要なものとし、新島先生を認める反面、その事業の困難さを常に人に話している。

新島先生のアーモスト大学の卒業は理学士 (Bachelor of Science) としてであり、数学、化学のノートが残されている。工学部の源流であるハリス理化学校は下村先生を教頭に開校したが、アメリカ留学中の下村孝太郎に新島先生は同志社に科学分野を振興強化させ、面目を一変させて欲しいと依頼している。

『新島襄全集』三巻、六一九頁) 下村先生はハリスさんとも会われて十萬ドルの寄付の旨意を理解しておられた方である。ハリス氏が同志社をサポートされたのは、新島先生の大学を作って、「人を育てる」ことに賛同されたようであり、ハリス氏自身「神と人類に職業を通して貢献しなさい。よい仕事が出来ると特質を養成する特質でもあり、これらの特質無しには如何なる人もよい人にはなれない。」ことを学生に話しておられたそうである。(『同志社工学会誌』一卷六頁)

新島先生の「人を育てる」ことについてもう少し触れたい。先にも述べた一八八四年夏のイタリアのトレ・ペリチェ滞在中の英文日記の中の随想の同じ頁に次の意味の記述がある。

私が再び教壇に立ち教えることがあれば、教室の中でいばんできの悪い学生に特別の注意を払うつもりだ。そうできれば、きつと先生として成功するだろうと思う。

森中章光先生によると、新島先生はそのように実際されていたようである。(『新島研究』七十七号、四頁) 森中先生は、新島研究会を創られ、『新島研究』の創刊をされ、新島資料の収集に努められた方である。「新島先生の二度目の海外旅行中に同志社では生徒の退学の処分を行なった。先生はこれにひどく気を使われたようである。帰国後すぐに行なわれた創立十年の記念式典でその退学生徒を思いその退学処分を残念がられた。この考え方は、さかのぼって、一八八〇(明治十三年)自責打掌事件(自責の杖事件、自責の鞭事件と呼ばれている)として知られる出来事に現われた新島先生の学生に対する考え方にも見られる。この事件は、新島先生の形に現われた行動のみを取り上げて生徒に紹介すると生徒が笑うことになる。これは新島先生の如き人物ならばこそ、なし得られたものなのである。別の例として、亡くなられる一週間前に横田安止(やすただ)宛の手紙にて、『……敗鼓之皮迄も捨テサル』と記され、破れた太鼓の皮でも、決して捨てない、即ち如何なる生徒と雖も必ず彼には天から授かった使命があるという考えを新島先生は示されている。その一人の存在の価値を認め見捨てず、使命感を自覚めさせ揺り動かすのが人間教育である。」と述べておられる。

新島先生のアーモスト大学時代の寮の同室の友人に五歳年下のホランドさんがいる。新島先生は英語やラテン語を習い、彼には日本の事を話しておられたことがホランドの両親宛の手紙で分かっている。ホランドは宣教師を父にもち自ら卒業後牧師の仕事をし、後年、西部ペンシルバニア大学(その後のピッツバーグ大学)総長とカーネギ博物館長となった人である。鉱物学が二人とも好きで、一八八七(明治二十年)年日本での皆既日食のアメリカ観測隊の一員として来日し、京都にて新島先生と再開している。そのときに新島の自責の打掌の教育観を議論したかは定かではないが、その後一八九八年、「ホランド総長が旅行中に三年生のクラスでドイツ語の先生の出席簿に鉄の重しをつけてアルゲニー池に沈めたり、ドイツ語授業の教室の壁に糊を塗りつけ七面鳥の羽毛をバラまくといういたずらがあり、学校側はクラスに十五ドルの罰金の支払いを命じた。他の三つのクラスの学生も同調し三日間のストライキとなり、新聞がとりあげ、父兄もとりあげる事件となりました。学校側も罰金を支払うまでは門を閉じ授業を行なわなかったそうです。ホランド総長が旅行からかえつてき、チャペルへ学生と先生達を集め、問題解決には十五ドルを学校に支払えば良いなら私が払いましょうと十五ドルを支払って事件の決着を図りました。」「新島先生は自分の掌を、室友のホランド先生は十五ドルで解決しました」とピッツバーグ大学の百五十年史の中のエピソードを北垣宗治先生から伺ったことがある。

森中先生が、新島の本質に迫り、その金鉱を掘当てねばなら

ないとおっしゃった金鉱が新島先生の学生を教育する真の姿であれば、天命を持つ個人の存在を認め個性を育てるところに「人を育てる」ことの本質があるように思われる。

このことに、思いをはせるとき、現在同志社学園のいくつかの学校で、生徒の退学処分という制度がある。新島先生の時代にも規則として存在したことは紹介したが、今一度、新島先生の実行された「人を育てる」ことの意味を考え、その制度を検

討してはと思う。

二百年の道のりを歩む今、あすの社会・人類に貢献できる人物の養成という創立者の意図を継承するべく、「教え」「育てる」ことを常に考えながら、新しいことを学生さん達より学んでいきたい。

Learn to Live and Live to Learn

(大学田辺図書館の正面壁のラーネッド先生のモットー)

還歳休悲病瀝身 鷄鳴早已報佳辰
早巳報佳辰 尚抱壯図迎此春
湯武策志抱壯図迎
は春

古 峯臨花 峯臨花 峯臨花 峯臨花
表

としました。

この影本は、明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎ 色紙(影本)

一葉一、〇〇〇円(送料一七五円)

(A)「時危思偉人」

明治二二年一月徳富蘇峰の依頼に
えて揮毫されたもの。

(B)「不止月下併能越 豈涉八州是我分
壯図却促男兒淚 滴々跋為縷々文」

明治二二年二月八日新瀉伝道に従事

していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C)「送歳休悲病瀝身 鷄鳴早已報佳辰
劣才縦乏濟民策 尚抱壯図迎此春」

明治二三年一月一日大磯百足屋で春を
迎えて詠まれた。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)一二五一―三〇三七・八

新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望に応じて、色紙の影本を、三点作成頒布するこ

同志社原理主義考

—「日本の近代化と同志社」のレポートから—

宮澤 正典

(女子大学教授)

原理主義はキリスト教史上、限定的に言えば、一九一〇年代のアメリカ・プロテスタント諸教派内に、十九世紀末以来広がりつつあった神学的近代主義、自由主義的傾向に対して生じたものをさしてよいだろう。原理主義運動はその延長線上にあり、聖書無謬、キリスト再臨などのキリスト教信仰の根本教義を主張し激しい論争が展開された。

以上の限定をはずして拡大解釈すれば、ルターも宗教の根本原理にまで立ち返って聖書に拠るほか自説をひるがえさないと公言した原理主義者であったと私は思っている。さらに普遍化するれば、現今のイスラム原理主義、ヒンズー原理主義も共通するところがある。原理主義のエネルギ―はきわめて急進的な行動様式となって表出し、そこには現状否定を通して建設へのエッセンスを内包しながら、むしろ、より破壊的活力源としても機能する。これが力となったとき、イスラム革命の最高指導者たちを支える勢力となったり、同じイスラム教国の大統領を暗

殺する勢力にもなりうるのは最近の歴史に明らかである。キリスト教のカルヴィンも神権政治の名のもとに独善化しジュネーブ市政において独裁を強行したのであった。

さて、この特集号の趣旨は「同志社の現状と将来像を新島襄の同志社設立の理想、教育理念に照らし合せ」ることである。いわば同志社原理と現状についての考察と提言であろう。そこで、いま同志社に在学する学生の思いをかりて現状を垣間見ることから始めたい。同志社諸学校三万二千余人の学生生徒の入学の動機と入学後の認識はいままでもなく区々であろう。それぞれについて知ることはできないが、同志社大学の総合科目「日本の近代化と同志社」受講生のレポートのなかにその手掛かりの一端があらわれているのでそれらをまず紹介する。

受験戦争のもとでは大学設立のいきさつまで理解する余裕など持ち合わせず、「かくいう僕自身もその一人だった。あろうことか新島先生の存在も、赤本(入試過去問題集)を読むまではしら

なかつた」という学生(文、英二)。二年間の浪人は大学というものを真剣に考えるよい期間であり、各大学の創始者、歴史、学風まで十分に理解したと自負し、そのうえで「同志社ほどの大学よりもすばらしいと言いきる」学生(文、社二)。また、同志社大学入試が新聞で問題となつたとき、同志社系列校の学生は建学の精神をよく理解しているから良いとコメントした教授がいたが、それは系列校以外の入学生への「侮辱です。精神というようなのは、理解する人なら一日でも理解して実践しようとするだろうし、理解しない人は百年たつても決して受け入れようとはしないものです」と主張して常に最前列で受講していた学生(法、政二)たちがいる。しかし、これらは自覚度の濃い学生であつて、三万二千余人の平均値といえるかどうか。対極には「僕は別に同志社の特色など学びたくはない。どこの大学へ行こうと同じではないのか。何か同志社独自のものを期待してこの大学へ来たのでもない。僕が合格した大学のなかで同志社が一番名前が売れていたからにすぎない。大半の人はこの大学を偏差値で選んで来たのではないか。それに関して何と言いつてしようとしても、それを聞くと白々しい。僕はそしておそらく僕たちは別に愛情など持つていないので意見も質問も感想もこれといつて無いのだ」といつて、なぜ名前が売れているかと考えたのかどうか、妙にカタヒジ張りながら在学する学生もいる。そして彼は「受講したのは単位を取得するためであつて、それ以上でもそれ以下でもない」と断つて(文、社二)。そういう受講生たちのいるこの総合科目は開設されて二十年

近い。同志社女子大学でも、これをモデルにしてようやく三年前に「近代日本と同志社」を開設した。ともに一般教育科目であつたが、同志社大学が三年前に一、二回生のみの田辺に移すまで三、四回生の受講生が意外に多かつた。これは女子大学でも共通している。同志社について何も知らないで過ごしてきてしまつた「同志社における自分探し」が彼らの受講動機といえる。

ではこの科目がどのような講義内容を提供しているのか。両大学の一九九二年度の場合のスケジュールは次の通りである。

同志社大学Ⅱオリエンテーション(担当者全員)、同志社の人々、新島襄と、山本覚馬、新島襄と勝海舟、同志社の宣教師たち、新島襄と弟子たち(竹中正夫)。明治大正期の女子教育と同志社女学校、昭和戦時下の同志社と女子部(宮澤正典)。新島襄・人と思想、新島襄の遺志を継承した人々・留岡幸助、中村遥、同志社大学の建学の理念とその現代的意義―同志社人としての *gospel* の確立のために(井上勝也)。社会主義とは何であつたか、キリスト教と社会主義あるいは基督教社会主義のこと、日本社会主義の一流流としての同志社、同志社の社会主義者・安部磯雄、村井知至、山川均、高島素之、同志社出身社会主義者の「同志社時代」回顧の輪読(田中真人)。特別講義・祖父オーテス・ケリーと新島襄と私(オーテス・ケリー)。海老名弾正(関岡一)。まとめ(担当者全員)。

同志社女子大学「オリエンテーション」(キャンパス・ツアー)、同志社チャペルほか、担当者全員)。創立者新島襄のおもかげ、新島襄のキリスト教教育論と英学校、現代と新島襄・信仰と行動、「新島襄伝」の研究・資料調査と紹介(武邦保)。創設期の同志社女学校・明治十八年事件まで(坂本清音)。明治大正の女学校そして同志社派の女子教育論(宮澤正典)。同志社女子部を支えた人たち・新島八重、ミス・デントン、松田道(坂本)。昭和の不況と同志社、昭和戦時下同志社の苦悩(宮澤)。エクスカーション・同志社の人々を若王子墓地に尋ねる(担当者全員)。同志社の生んだ社会主義者、社会運動家、作家、文化人、伝道者、婦人運動家、思想家(武)。特別講義・同志社女子部の歴史と現況(竹山幸男)。ミス・デントン(小野恵美子)。ビデオ「女のたたかえ」。デイスカッション(担当者全員)。

しかして、女子大学の昨年度講義終了後、今後の講義の参考にするために成績評価とは無関係に感想を求めたもののなかから、いささか手前味噌的に拾ってみる。

「今まで何とはなしに来ていたこの学校にも、意味のあることを学びました。しかし世間では女子大生といえば勉強もせず遊んでばかりで派手で、というイメージがあります。そのような事実をやはり私たちが社会に出たときにくつがえすような立派な女性になりたい(学芸、英二)。「同女に通つてもうすでに三年がたとうとしています、最初の二年間は新島先生のこと

など、はずかしながらほとんど知りませんでした。同女に通う人たちのなかにはそのような人もいます。改めてこの同女に通えることを、私の誇りとしていくことができると思いました(学芸、英三)。「今まで新島襄という存在は正直いつて私のなかではきわめてうすいものでした。まだまだ理解出来ない事はたくさんありますが、もし私がこの近代日本と同志社をとつていなければ、同志社と新島先生のことを何も理解しないままで卒業していたかもしれないと思うと本当にこの授業を選んでよかった(学芸、英三)。「私は卒業するまでに絶対この講義を受けて、自分が通う同志社女子大学についてもつとりたい、もつと歴史に触れたいと思っていました。同じ四回生の友人達と共に、期待を胸にとることにしました。そしてこの私の過剰なまでの期待を裏切ることなく、本当に有益な興味深いお話しを先生方は多くして下さいました。今ではこれまでも増して同志社女子大学への愛校心は強くなっています。この講義は私に対する素晴らしい影響だけでなく、将来的に何十人もの、何百人もの子供達へ影響もあるような気がしてなりません。というのは私は京都府中学校の教員採用試験に合格しまして、四月からは教壇に立つわけですが、この講義で体験した」ものを生かしたい(学芸、英四)。また、三年編入学の四回生は「もつと早く同志社や同志社女子大学の歴史を知りたかった。そしてもつと前からわが校を愛したかった。一年間この授業を受けて今切実に思っているのはもつとこの学校、同志社女子大学にいたかったということです。新島先生のことそ

してそのまわりの人々努力を知ったことは、私に同志社女子大学の学生であるという誇りを与えてくれました。もう少しで卒業ですがこの大学に入ることができたことを心からうれいと思っております(学芸、英四)。「今、私達はこれからの同志社大学、同志社女子大学のあり方について真剣に考えなければならぬ時にあるということです。日本の大学はこれからも今まで以上に女子教育に力を入れながら、同時に男子教育にも力を入れるべきだと思います。女性と同様、男性の意識の改革がなければ何の進歩もありません。その為に同志社大学は男子学生が社会に出てから決して女性を見下すようなことのない男性になれるような教育にもっと力を入れるべきで、それがこれからの共学大学の課題であり、同志社の課題であると思います。いつか本当の意味で男女平等の世の中になった時でも、女子大学は本当に必要なのでしょうか。私は一年間この授業を受ける度に考えているのですが、まだ結論に達することができません。もっとそのことについて先生の考えをお聞きしたかったです。同志社女子大学はすばらしい伝統を持った大学です。私はとても誇りに思っているのですが永遠に同志社女子大学はなくならないでいてほしいのです。その為にも女子大学の意味についてもっと深く考え、その存在意義を数多く見つけて認識しておく必要があるのではないかと思います(学芸、英三)。

同志社の存在意義についての関心は同志社大学のレポートにも多く見られる。

「同志社とキリスト教。それは創立以来車の両輪のように共

に歩んできた。しかし一九九二年入学の私にはその二つが、ほんの一部をのぞけば、共に歩んでいる様子を実感することは実に少ない。新島先生の目指した教育とは現在の同志社大学にとつていったい何であろうか。もちろん大学の経営上、大学の巨大化は仕方のないことかもしれない。しかし大学の本来の目的理念を知らずに入学し最後まで分らずに卒業する現状を創立者は喜んでいないはずである。キリスト教の理念が学生の中から完全に失われているということは同志社大学自体の存在意義の消滅につながる。すなわち、大学名を他大学の名前にかえても、実質上何ら差しつかえない状態にあるといえよう」と分析してその対策を望む(法、一)。同様にキリスト教主義の喪失状態は「新島襄が同志社に詰め込んだ理想の思いを捨てるということであり、それは同志社を骨抜きにしてしまう。その為、同志社は土台を失い、方向感覚を失って、目先の利益にぐらんで誤った方向に進む恐れがある」として、同志社当局が明確にキリスト校主義興起の方策をとるべきことを提言している(法、二)。また「同志社のキリスト教への関心は極めて薄いと察せられる。もはやキリスト教主義とは名ばかりになりつつあるのだ。大切なのは、何事においても意味を与えてやることである。まづ我々に、どうしてキリスト教が我が大学と切っても切れない関係にあるかを理解させる場を与えるべきである。かりにも、同志社で四年間学ぶことになった者が、母校に愛着を持っていないことほど悲しいことはない。ただ単に四年間の人生のインテリバルが欲しかったのなら、なにもわざわざ同志社である必

要はないだろう。『同志社』という深い意味の込められた名前の大学の学生なのだ、と自覚する必要がある。百余年という長い歴史はともすればその志の意味を変えてしまったかもしれない。ここは思い切った改革に踏み切れる人物が現れない限り、事態は改善されないことだろう。いきなり難しいことは望まない。まずは『氣付く』ことから始めようではないか、皆でもって。

同大生はこんな程度ではないはずである」(文、英二)。同志社が発展改革に努めていることは認めるがなお不十分であり「建学の精神を貫くことが改革の為の努力をしないことと同じであつてはなりません」(法、政一)と戒め、カリキュラム面でも「同志社でなければ、この勉強はできない」といった所まで改革を徹底する意気込みがないと、全国から学生は集まりません。同志社が名実ともに日本の有数の私学となるには学問的な面での同志社カラーを打ち出すことが最も必要ではないでしょうか」(法、政二)と提言している。

なまやかな改革委員会などより確かな現状認識から語られているように思う。だが冒頭に言及した原理主義のような意味での同志社原理主義運動に転化して機能するような兆しとなるものではない。同志社の歴史に振りかえってみると、一八八四明治十七年のリバイバルは、一種の原理主義運動であった。その渦中にあり、自らもそれを体験した池袋清風は、すでに三十代後半の年嵩の生徒で、一面醒めた目をもって記録していて、いまま鮮やかにその情景を伝えている(同志社社史資料室編『池袋清風日記』一九八五年)。生徒たちは「今回聖靈降臨ニ感激スルノ余」

り、試験前も厭わず、この「驚クベキ福音ヲ、各地方教会ニ報知セン為ニ」出発しようとしていた。「上原方立子立テ、今回ハ必伝道ヲ許サルベキ理由ヲ述ヘラル。多ク熱心ノ生徒其理ニ感シ、声ヲ放チテ泣ケリ」。新島襄を含む教師と生徒の応酬の後、さらに「デビス氏英語ニテ話シ、市原氏激シテ話サレ、新島先生泣テ話サル。是ニ於テ吾聴クニ忍ヒズ、基督ニ祈リ即述ヘテ曰ク、両方共ニ神ノ為ニシテ各至当ナリ、故ニ之ヲ全ク制止スベカラズ」(3月20日)というなかで出発する者、「狂ヒ出シ」た者もあった(21日)。新島は「実ニ伝道ニハ進メント欲スルモ」(20日)、説教では「種々複雑、今回ノリバイバルニ付キ生スベキ弊害ヲ誡メラル」(23日)というようにとまどいながら制止せざるをえなかつた。

原理主義運動は高揚するほどに自らを陶酔的に正義と確信させ、その立場に立つかぎり非寛容な独善におちいりやすい。それがまさに現状批判の急進的で強力な活力源となるのである。ところが、批判の準拠とした原理は達成されるよりも、それを錦の御旗としてエネルギーが枯渇するまで批判、破壊の永久運動に転化する傾向のあるのもまぬがれ難い。これが政治的に権力を掌握した事例はかつて今もある。その構図は小集団内でも見られる。社会的小グループにとどまる場合には、その影響力はほとんどなく、自己満足的閉鎖的集団にとどまり、あるいは異端的立場をとることになるだろう。場合によっては被害者の意識をもって集うかもしれない。しかし、高ずる主義は突出して過激化して社会を恐怖させる力も持ちうる。

さて、現今の同志社があまりに非同志社原理主義に傾いているとしたら、新島はリバイバルのときと逆の制止をしなければ、自己の教育原理を喪失することになるだろう。「同志社大学設立の旨意」に凝縮される彼の教育原理は、同志社内の片隅で少数者だけが独善的にまたは自己満足的に所持されていれば足りるというものではない。いまもなお、同志社の内外に有用な原理であるという基本的な合意ユニティがまず一、三四四人の専任教職員間で再確認され、そのうえにそれぞれが思念する同志社が構築されるべきである。山本七平の論理をかりるならば、新島襄と後継者たちが大切なものとして継承してきた営みこそが同志社の継続性の条件であり、「継続性の保証のない文化が果して永続するであろうか。永続性の保証のない繁栄が果してつづくのであろうか」(「禁忌の聖書学」)の問いかけになる。同志社の永続性の保証をどこに求めるのかといえば、同志社原理以外にはあるまい。新島襄生誕一五〇年の意味はそのことを認識する機縁であり、それに応じようとしている学生がいることを紹介してきた。「穏やかな同志社原理主義運動」を望むなどというのは原理的に矛盾するだろうか。急進的政治や過激な宗派活動によって求心化させるのではなく、教育の領域において右のような合意に立ちつつ個々の人が選択的に構築するという形で、原理主義運動がそのように落着する可能性があると思おうのである。

『キャンパスの年輪』

—同志社今出川校地—



(増補改訂)

B5判 二一二頁
 頒価一、五〇〇円

社史資料室長

河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段、記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友、同窓は青春時代を、在學生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購入ください。

●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

取り扱い同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八

二百年の大計の半ばを過ぎて

—同志社の現状と将来を思う—

坂本 武人

(女子大学教授)

二百年の大計

わが同志社は、その設立時において、百年、二百年の完成を
目指す長期構想のもとに打ち立てられた。

創立者新島襄先生は、同志社大学設立の旨意の中で「諺に
曰く、一年の謀ごとは穀を植ゆるに在り、十年の謀ごとは木を
植ゆるにあり、百年の謀ごとは人を植ゆるに在り、蓋し、我が
大学設立の如きは、実に一国百年よりして止むべからざる事業
なり」と宣言され、盟友勝海舟に対し「此の事業たるや…二百
年後を期せなければなりませんまい」と語られたと伝えられてい
る。(森中章光編『新島襄片鱗集』)

創立以来百十八年。二百年の大計の半ばを過ぎ、耳順の域に
ある今、われわれには新島先生の遺志を受け継ぐと共に、新た
なる発展への展開が求められている。

同志社の原点

新島先生が二百年後を期して始められた大事業とは何であつ
たのか。過ぐる年二九〇年、新島先生永眠百年の記念すべき
年を送り、三年目の今年、生誕百五十年を迎えるに当り、まず、
この点を思い起してみよう。

同志社創立百年を迎えた頃、当時の同志社総長上野直藏先生
は、その著『同志社百年—その前後』の中に、「同志社の原点—
良心教育」という一節を置き、その結論に近い部分において、
次のように述べられている。

同志社設立の原点に帰れ、ということが口にされます。そ
の百年の歴史の原点に帰れ、と叫ばれます。それはキリス
ト主義という大義、大道に帰れ、ということだと考えます。

新島襄に神の働きかけがあつて、神との出会いが生じた、という事実に戻ることです。事実というのは単に物理的に現象が起つた、という事実ではありません。この神との出会いという事実は靈的事実なのであります。そういう靈的事実が同志社創立という事点での現実であつたのであります。原点に帰れとは、そういう現実へ帰れ、ということだと思ふのであります。それはそういう過去の靈的事実、現実を不断の今たらしめることだと確信しております。

同志社は、百年前、神よりの働きかけ、神との出会いという靈的体験を受けた新島先生が、御子イエス・キリストの指し示される大義・大道を指して創立されたものであり、そのような新島先生の現実と祈りを、今に享け継ぎ発展させることが、同志社の原点に立ち帰ることであると、上野先生は、百年目の節目をつなぐ総長として私たちに伝えられているのである。

同志社教育の原点は、「上帝を信じ、真理を愛し、人情を教くする」キリスト教主義であり、これが二百年の歴史を通して「血液の如く、万事万物に皆注入」されることを新島先生は願ひ、夢みて、同志社を設立された。

キリスト教主義教育の動向

百十八年の歲月は、同志社におけるキリスト教主義教育を如何に浸透させてきたか、残念ながら新島先生在世期における燃

えるようなキリスト教信仰の光は、少くとも目にみえる形においては輝いていない。

明治二十一年までの同志社英学校の卒業生名簿を見ると、百七人中八十八人が同志社教会(第二公会)の会員であり、第一公会、第三公会員を含めると教会員は九〇パーセントを越え一〇〇パーセント近かつたと思われる。そして、これらの生徒は教師と共に学内外の伝道に努め、学内に「リバイバル」をもたらせ、学外各地に新たな伝道拠点を築き、日本におけるキリスト教界のリーダー的な役割を担う教会の設立に貢献した。

しかし、いま、同志社に在籍する学生・生徒の中、クリスチヤンとして教会に籍を置いているものは、果して全体の何パーセントに当るであろうか。九〇パーセントが絶対「ノー」、五〇パーセント「ノー」、一〇パーセントは「否」、三パーセント「どうだろう」、一パーセント以下「そんなところか」といった声が耳を澄ますと聞こえてくる。

また、同志社女子大学家政学部で、卒業生(女専、女子大学)を対象とする同志社教育についてのアンケート調査を行ったところ、女子大において毎日行なわれていた学内礼拝に在学中「ほとんど毎回出席していた」とするものは、大正時代の卒業生で六二・五パーセント、昭和戦前(元年〜四年)七一・八パーセント、戦中、戦後(一五年〜二四年)八四・五パーセント、二〇年代後半七五パーセント、三〇年代前半三八・一パーセント、同後半一六・一パーセント、四〇年代前半一一・三パーセント、同後半五・二パーセント、五〇年代前半一・一パーセントと、

経済の高度成長、あるいは大学の大衆化と反比例して激減しており、同志社におけるキリスト教主義教育はまさに「風前の灯」ともいべき状況に立ち至っていることがわかる。この傾向は、ひとり同志社女子大学家政学部のみならず、同志社諸学校に共通するものといえよう。

また、同じアンケート調査に設けた他の質問項目、「あなたが同志社で学んでよかったと思われる点は」に対し、「キリスト教の考えが身についた」という選択肢を選んだものは、昭和一五年〜二四年の卒業生が五〇・九パーセントと最高であり、「新島先生の教えにひかれた」とするものは大正時代の卒業生の六二・五パーセントがトップであった。そして、これらの比率も、礼拝出席率と同様、時の経過につれほぼ一貫して低下し続けており、ここでも、同志社教育の原点であるキリスト教主義教育ははつきりと衰退傾向をみせている。

しかし、その減り方は礼拝出席のように激減しておらず、五〇年代前半の卒業生でも、前者二一・二パーセント、後者二一・四パーセントと辛うじてではあるが二桁台をキープしている。

同志社百年の歴史は、新島先生が打ち出されたキリスト教主義教育という原点を現実には拡大再生産するには至っておらず、縮小再生産のプロセスの中にあるが、その根の部分は維持されていることを、この数字は私たちに示していることと見てお

さる。いま、同志社にあつて、二百年の大計の成就に向けて努めることが求められている私たちは過去を振り返り原点に立ち帰り、

新島先生の播かれた素晴らしい種が、過ぎ去った百十有年の歴史の中でどのように育ち、根を下ろしているかを見極め、その根の部分から、そして幹の部分から神に似せて作られた「人間が人間であることの最も大切な部分」（上野直蔵）を受け継ぐ新たな教育の理念と方法を豊かに芽ぶかせ、繁茂させなければならぬ。

大綱化（大学改革）と同志社の理念

幸いにして、客観情勢は、同志社がその原点に帰り、神と人々に仕える学園として新たな使命を掲げ直進することを容認する方向に動きつつある。その一つが文部省による大学改革を目指す大綱化の策定である。

「同志社よ、立学、建学の精神に立ち帰り、独自の教育理念を確立せよ」という声は、かつては、「期待される人間像」とか「教育合理主義」を標榜し、資本の論理を受け入れた経済大國日本を実現させるために最もふさわしい能力を身につけるための画一的な教育を奨励し、私学に対しても国庫助成と引き換えに、建学の理念や立学の精神にもとづく独自の教育はできるだけ稀薄にし、できれば払拭することが望ましいとさえ考え指導を行ってきたかに見える文教政策、文部行政の立案、推進を実施する側から発せられるようになっていた。

私学同志社は、新島先生の建学の精神にのっとり、堂々と自らの教育理念を社会に向つて披瀝し、その実現を図る好機が、

いま再び訪れようとしているのである。

同志社女子大学では、大綱化に沿って主体的、かつ独創的な教育の推進を図るための検討を始め、まず、新島先生が教育の原点とされたキリスト教主義、および国際主義、ならびにリベラル・アーツ教育を基本理念とすることについての確認を評議会ならびに教授会で行い、その線上において将来構想を策定する論議を深める作業に入っている。

このように、新たな社会環境の下にあつて、創立者の教育理念に立ち帰り、百十余年の歴史を通して守られてきた立学の精神に新たな光を注ぐ教育を続ける限り同志社は不滅であり、神の御手の導きによつて栄光の学園としての地歩を固めうるものと確信する。

同志社教育の原点の原点

新島先生に、同志社の原点、あるいは同志社教育の神髄ともいふべきキリスト教主義教育の必要性を強く意識させたものは、その成長期における生活体験によるところが大きい。

新島先生が国内で過した成長期は封建社会の末期であり、一方で身分制度を始め、封建秩序を強力に維持存続させようとする動きがあり、他方では、それに抗して自己の存在を主張しようとする若者が新しい社会秩序を求め、折あらば行動を起そうとする時代であつた。そのような中で、新島先生自身、封建領主の、人を人として認めない一方的な命令や仕打ちに強く反撥

する意識に駆られ、自からが良しとする行動を取ろうとすると、その都度、厳しく叱責され、処罰された。しかし、その際も「なぜあなたは、われわれを犬や豚のようにしいたげるのか?もし、あなたがわれわれを支配するなら、あなたはわれわれを自分の子供のようになんて愛さなくてはならないの」と心の中でつぶやくに止まっていた。(J・D・デイヴィス 訳 北垣宗治『新島襄の生涯』)

そして、命令に従い不意な仕事を続ける中で、黒船の来航等に触発され新しい社会、外国の事情を知りたいとの思いを強く意識するようになっていた頃、偶然手にした漢訳の「アメリカの歴史」を誌した書物により、近代国家アメリカに人間尊重、人格重視の思想、制度のあることを知り、その社会観、人間観の日本との違いが、それぞれの社会の根底にある儒教道徳とキリスト教倫理の相違によるものであることに気付いた。

新島先生は、身分に縛られ、門地によつて規定されることによつて、人が人として持つて持っている天分(可能性)を高め、伸ばすことが制約されている日本の現状と、一介の農夫でも、その才能と努力によつて大統領にも選出される現実を書物を通してであるが垣間見たのである。そしてそのあまりにも大きな違いを知り「驚嘆のあまり私の頭はとろけるような気がした」と述べており、また「私はすべての国の政体はアメリカの大統領制のようになんてはならない」と書き誌している。

新島先生にとつて、このような日本とアメリカにおける社会機構、政治体制、人間観の違いは、その淵源に遡ると、すでに述べたように身分秩序を重視する儒教道徳と神の前に全ての人

は平等であるとするキリスト教の人間観、世界観の違いに根ざすものと意識されたのである。この思いは渡米前における領主（安中藩主の自分に対する対応と、渡米後のおけるハーディー夫妻の接し方の大きな違いを体験することによっていよいよ強固なものとなった。そして、自からキリスト教の信仰の道に進むと共に、帰国の暁には、封建秩序の下にあって、その持てる能力を高め活かす途がとぎされ、悶々と日を過し、若さゆえに暴走し、不軌、不徳に身を持ち崩している故国日本の多くの若者たちに信仰による希望の光と道標を得させたいという願を抱かせた。これが新島先生をしてわが同志社の創立を悲願のものとなさしめたのである。同志社の原点の原点は、キリストの父なる神の大きな愛に導びかれた人間愛、人類愛に根ざす愛の精神であり、より具体的には封建体制のもとにあって儒教道徳に縛られ、人でありながら人としてその人格を認められないで日々を過している抑圧された日本人の救済をうながす日本人愛にあったといえる。

個人をも社会をも救済

新島先生の同志社教育の原点はキリスト教主義教育であるが、それは、形式主義の、型にはまったキリスト教信者を養成するためのものではなく、「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」神の愛に応え、神と人に献身的情熱を持ったキリスト者を育むことを目指すものであった。

このような新島先生の指導理念に導かれた初期の同志社の学生、生徒は洗礼を受けると直に、いや、信仰を自覚すると未受洗であっても、学内外においてキリスト教の伝道に努めいそいでいた。当時を振り返って安部磯雄は次のように述べている。

兎に角其当時に於ける私共の信仰は恰も基督教の初代に於けるが如く熱烈なるものであった。私は将来基督教の宣伝者たるべきか否かに就ては判然と考へては居なかつたけれども、兎に角基督教精神を以て如何なる事業にも従事すべしといふことは堅く決心して居た。基督教は個人をも社会をも救済するという旗幟を標榜して居るのであるから、基督教徒は各自小救主を以て任じねばならぬというのが私共の抱負であった。

そして、このような抱負のもと、若干十七歳（洗礼を受けて六ヵ月後の夏休み）の安部磯雄は、夏期休暇中の日曜日と水曜日に郷里福岡の教会において、牧師不破唯次郎の前座として演説（教）を行ったとのことである。（安部磯雄自叙伝「社会主義者となるまで」）

建学の精神を思い起し、それぞれに独自の学風を確立し、多様なニーズや価値観を充たす大学が求められている現在、私たちは僅かな違いに目くじらを立てる形式主義や権威主義によりたのむのではなく、同志社初期の自由闊達なキリスト教主義に立ち帰り、「個人をも社会をも救済する小救主」となる情熱を持

つことが、いま、同志社にあり、建学の精神を受け継ごうとする一人一人に求められている。

一 国の良心ともいべき人

「個人をも社会をも救済する小救主」と安部磯雄が言う場合の救主とは、「大学設立の旨意」の中で新島先生が述べておられる

一 国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一國を組織する教養あり、知識あり、品行ある人民の力に拠らざるべからず、是等の人民ハ一國の良心とも謂ふ可き人なり、而して吾人ハ即ち此の一國の良心とも謂ふべき人々を養成せんと欲す

という言葉の中の「英雄」を指すのではなく、「一國の良心とも謂ふべき人々」である。そして、また、新島先生が「一國の良心」とか「良心の全身に充滿した大丈夫」とか「良心を手腕に運用する」といった場合の良心とは、単に、世間で言う「良心に恥じる」とか「良心的行為」といった道徳的・倫理的な意味でなく、神の大きな愛を受け入れ、そのみ心に沿った生き方を示すものであり、同志社の原点とも言うべきキリスト教主義、キリスト教精神を具現化するものである。上野直蔵先生は、これを「同志社の原点―良心教育」と要約されている。

多様な価値観と自己中心的な物質主義に翻弄され、ともすれば自からの立つべき場、行くべき所を見失おうとしている現代社会にあつて、全てを創り、全てを育て、全てを愛する神の意志の具現化ともいべき良心教育の光を掲げ、照らし続ける限り同志社は永遠に一國の良心となるであろう。

同志社のこれからの歩む道

元総長住谷悦治先生は在職中に次の「五つの憲章」を提言された。(同志社の一隅から)

第一、わたしたち同志社人はよい同志社をつくりましょう。
第二、わたしたちは人間性を尊重し、学園に真の自由と平等を實現しましょう。

第三、わたしたちは、国際友好主義と平和主義に立ちましよう。

第四、わたしたちは、学園内を美しく清潔に保ちましょう。
第五、わたしたちは、よく学び、また明朗に楽しく健康な学園生活を築きましょう。

先生は第一に掲げた「よい同志社とはいったい何か」と問い、「端的には、新島先生の遺言の中に見出されるところのキリスト教精神につきる」と答えられている。また、新島先生の遺言としては、次の二項目を掲げている。

一、同志社の前途は基督教の、徳化、文学政治の隆興、学芸の進歩三者相俟て行ふ可き事

二、同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に從事する二係らず、皆精神活力あり、真識の自由を愛し、以て邦家に尽す可き人物を養成するを努む可き事

また、住谷先生は別のところで次のように述べられている。

人生でもっとも尊い意義あることは、その人びとの才能の優劣とか、知識の大小とか、身分とか地位とか、財産とか名誉とか、美貌とか、体格の大小・強弱とか、さらに人種・民族・国家さえも超えて、そうしたことを、もちろん、それぞれに内在せしめても、そのようなことに深くとらわれることなく、この世に生まれた自分にあたえられたところのものを、全力をあげて現在の仕事に打ちこんで、誠実に努力することだと思えます。何のために？ どんな仕事？ もちろん世の中の多くの人びとの幸福のため、社会の多くの人びとの平和のために、抽象的だといわれておりますが、高い理想のためにです。人類の幸福をもたらすためです。

新島先生が、「邦家のため」といわれているのに対し、住谷先生は「人類のため」と述べられている。ここに、同志社の百年単位での新たな発展課題、すなわち二百年の大計に向けて同志社の受け身の外から変えられる国際化から、交流する国際化、

人類のために尽くす国際化への課題が示されているとみる事ができる。

原点に帰ることは、昔に戻ることではなく、そのよつて立つところを明確にし、その進まんとする道筋を展望し、新しい時代の、新しい人々のニーズに応え、人々の幸福（人が人として生きる喜び）に貢献する条件を見出すことである。

